明治廿六年拾月廿四日發行

女鑑

第四十九號

東京國光社

女鑑第四十九號目次

原宗右衛門の母



女鑑

家庭の一科

母となり、姉となりて、其の兒女、其の弟妹を養育するは、天職中の、最重大、且、尊尙なるところにして、而して、又、最困難なるところとするなり。俚諺に、小兒は、夫婦の鎹といふも、理あることなり。啻に、夫婦の鎹のみならず、實に、家庭の光明にして、一家の和樂は、小兒のために維持せらるゝともいふべし。されば、小兒をして、有益に、且、趣味多く生活することを得しめんとするは、家庭の主人たる母たるもの、常に願ふところなるべく、彼の幼稚園の起こるも、亦、これに外ならざるべし。今、吾人は、最有益にして、且、趣

味多き家庭の一科を思ひ出だしたれば、即、こゝに、聊、其の意見を述ぶることゝせん。

諸孃は、彼の植物學の、趣味ある一科なることを知らん。人は、兒童のとき、即、精神、未暢發せざるときより、已に、花を愛づる心あり。而して、草木は、萬物中、最、種類多きものにして、且、美麗にして、趣味多きものなり。而して、之を採集するは、甚快樂なる業にして、之を解剖するも、亦、最容易なりとす。故に、今、植物學を以て、家庭の一科とするは、無理なる注文ならざるのみならず、又、最有益なることにあらずや。

抑、植物學は、或學者のいへる如く、精神教育の根庭となるべき學科を除く外、大小の學校において、最、理由ある要求の下に立つものにして、植物學上の智

識は、農學はもとより、醫學、藥學、地理、地質の諸學者に必要なるのみならず、教師、辨護士の如き能辨學を要するもの、及、歌人、歷史家の如き修辭學を尙ぶものゝ、皆、譬喩を、こゝに取るを以て、人の感情を惹く捷路とするところ、而して、旅行するとき、將、郊外に散策するときに於いて、植物學を知る程、到る處に、興味を收むべきもの、未、之あらざるなり。

この故に、母たり、姉たるもの、其の家庭には、適宜の標本を備へ、適宜の採集凾を置き、以て、兒童の用に供ふべし。植物學研究の順序は、其の觀察、其の分類、其の推究、其の適用、之なりと雖、兒童に在りて、分類以上に上ることを要せざるべきなり。葉、花、莖、幹、根、種等の如き、分明なる類號に注目せしめ、各草木の通有の性質、及、其の差異あるところを示し、以て、比較觀

察の力を錬磨せしむべし。而して後、草木の形狀、組織、彩色等の細別を敎ふるも可なり。畢竟、心性開發の順序を誤らざる樣、庶物指敎の方則によりて、いやしくもすべからざるにあるのみ。

此の如くにして、又、更に、古今、万葉等、及、諸家の歌集、若くは、詩經、及、其の他の漢詩等の、最簡明なる歌詩、又は、古今の格言にして、草木に關係あるものを幷せ敎へ、以て、美の觀念を養はしむるは、最妙なりとす。只、年齒に隨ひて、斟酌するところあるべきなり。以上敎授の方法につきては、吾人、他日、更に、之を說くところあらん。吾人は、切に、この趣味ある一科の、家庭内に採用せらるゝことの遍からんことを、一向に希ふのみ。

論説

婦人の徳と不徳

岩下方平

婦人は、理性に弱くして、情緒の強きものなりといふ。夫、果して然るか。然れども、情も、亦、理の上に築かざるべからず。理と情とは、相離るべきものにあらざるなり。只、詩人の如きは、時に、重を、情に措き、其の理のために掣かれざるを感頌する場合多し。こは、情の昇騰沸熱したるときの謂にして、此の如き情の高潮は、三嘆すべきもの多しとす。

然れども、婦人の情には、或は、利己より出で、徳性に反するものあり。これ、婦人の情は、尊むべからざるのみならず、却りて、不徳の張本となり、非理の

基本となり、罪惡の底には、婦人ありなどいふもの、往々、出で來るに至るなり。

この世には、不德罪惡の數は多かれども、一として、利己といふ惡觀念より發せざるものは、之あらざるなり。己あるを知りて、他人あるを知らざらば、倫理、何を以て立ち、人類、何を以て蕃息し、國家社會、何を以て繁榮なるを得ん。利己といふ惡觀念は、父子兄弟の中をも裂く利刀なり。況、他人をや。仁といひ、恕といひ、忠といひ、愛といひ、慈悲といふ、總べて、この利己の觀念に反したるにあらざるはなきなり。市井の俠者は、其の武を以て、法を乱る乱民なるにもかゝはらず、又、其の大經中庸を得ざるにもかゝはらず、世の、其の志を憐みて措かざるものは、又、彼が、利己的の念なきに取るなり。人は、

到底、利己の傾きあれども、尚、公義的の理性は、泯滅すること能はず。天眞の良德は、事に觸れ、物に托して、世を經るに從ひて、益發達して、道德の教も、次第に發達し、道德の行も、次第に普及するなり。然るに、彼の婦人には、往々、內心如夜叉の本色を存して、利己の私情を留め、以て、世の罪惡の種子を蒔きをるものあり。

然れども、世の常の諺にも、女は、情に脆しと稱す。夫、情は、道德の寓するところにして、身を舍てゝ、理に殉ふも、國に殉ふも、みな、情の作用なり。情に脆きは、義人、聖賢の常なり。然るに、婦人の、獨、之に反するものは、彼の情といふは、利己の情にして、結局は、道理に伴はざる情なればなり。

余は、彼の無情の頑者を惡む。然れども、名を、情に假りて、私を營む僞善者、

即、世の常の俗婦を悪むこと、又、これより甚しきを得ざる能はざるなり。嗚呼、諸嬢よ。諸嬢は、決して、此の如き濁世の俗婦となること勿れ。世を動かし、世の進歩を與へたるものは、理にあらずして、情なり。理は、死物なり。情は、活物なり。情なからずは、この社會は、枯死せん。情なからずは、湊川に討死せられし楠公も、之なきなり。父を留めて死諫せられし小松内府も、之なきなり。涕を呑み、夫の犠牲となりし袈裟之前も、之なきなり。忠とは何ぞ。義とは何ぞ。貞とは何ぞ、みな、一情の證果のみ。只、所謂、情も、徳性に發する情、即、公義の心に發する情にして、身を忘るゝといふを以て、本とするなり。身の利害、身の榮辱、身の生死を忘れずは、いかでか忠、いかでか孝、いかでか貞節を得ん。道徳とは、畢竟、全社會、全人類、全國家の爲に、この身を、犠牲に供

ふる行に外ならざるなり。

物の道理を知るといふよりは、物の愍を知るといふことは、道德の大要なりとす。然るに、この物の愍といふは、即、已を推して、人に及ぼす、已の欲せざるところは、人に施す勿れとの謂にして、己を舍て丶、人に殉ふを以て、至極とす。されば、婦人の、情に脆きは、尤むべきにあらず。其の情を推して、物に及ぼし、所謂、わが身をつみて、人の痛さを知るといふが如く、遂には、人の痛さを、わが身に引受けてだに、人を救ひ、世を救はんといふこそ、婦人の、皇神に禀けたる性を完うするといふべきなれ。而して、其の子を敎へ、其の弟妹を育むにも、彼等の腦中に、常に、この精神を吹き込み、あはれ、公に殉ひ、國に殉ふ健丈夫となり、貞烈女となり、所謂、『大君の邊にこそ死なめ』、『火にも水にも吾なけ

なくに』の氣象を養ひ立つべし。ゆめ、私情の奴隷となりて、身を立て、家を富ますなどいへることのみをもて、其の心を充たし、其の子弟を賊ふ勿れ。あなかしこ。

女子要言　第二篇　（二十）

三輪田眞佐子

第三　己を待するを薄くし、人を遇するを厚くすべし。女子の天稟、自、勞を取り、人に、樂を讓るべきものなりと雖、稍もすれば、己、滿足を求め、人の禍福を顧みざる反相を呈することあり。見よ。世には、人の、己になす處、充分ならざるを謚く女子にして、其の家の爲、深夜、雪を踏みて來る客人を待遇するを厭ふものもあらん。其の他、己の本分は果たせりと考ふる事にして、尚主我主たるを免れざるは、女子の通僻なり。若、此の次第を悟り得ざる女子あらば、夜半、

夢覺むる頃、手を胸にして、既往の行爲を再思せよ。覺えず、冷汗の湧き出づるばかりの事もあらん。昔日、陶侃の母湛氏は、賢女の譽高かりける女子なりしが、或時、賓客、馬に乘り、陶侃を訪ひたりしに、家貧にして、其の馬を養ふべき秣さへなきのみならず、飛雹、軒を打つ夜なりければ、其の母、忽、己が寐席を切りて、馬食に充て、且、直に、女子の、最愛すべき頭髮を斷ち、之を、髢に賣り、其の價を以て、酒食を購ひ、而して、柱を削りて、以て、薪とし、速に、これを料理し、少も厭ふ色なく、且、其の客に、其の事情を知らしめずして、待客の禮を盡くしたりとかや。須らく、女子の交際は、斯あるべし。あはれ、食前方丈の奢をなす女子にして、西洋流の習慣と稱して、冠婚喪祭の義理をさへ欠くものは、何の心ぞや。

第四　禮を離るべからず。

交際は、知人相集まり、共に、月を賞し、花を弄する如き遊惰のためになすものにあらず。或は、男女、濫に往來し、席を同じうして、以て、談笑する目的にあらず。全く、人生の目的を全くするに必要なる相互の關係にあり。されば、交はるには、禮讓を以てすべし。禮讓なき交際は、久しかるべけんや。程子曰はく、始めて交はるに、道を以てせざれば、終に、隙あるもの多し。故に、交を結ぶには、始を愼むべしと。殊に、女子の、男子に交はるときは、梨下の冠、瓜田の履に於ける如く、疑を免れず。愼まざるべけんや。公父文伯の母と、季康子と會する時、各、其の閾を踰えざりければ、仲尼、之を評して、男女を別つ禮となしたりき。世の頻繁なる今日は、固より、男女交際の必要ある場合も起こらん。然れども、禮の一字は、須臾も忘るべからず。

第五　相狎るゝなかれ。

夫、親しきは、疎き初にして、疎きは、親しき緒なり。昨日、刎頸の友と思ひしもの、今日、己が仇敵たる例、少なからず。昔日、晏平仲は、人に交はるに、久しくして、而して、之を敬せしとかや。女子は、必、此の一言を忘るべからず。何となれば、其の天性、輕信し易ければ、必、知人と思へば、敬意を欠き、失禮の擧動をなせばなり。故に、人と交はらんとせば、先、其の爲人を知るべし。蓋、人は、光榮の時は、我後れじと、爭ひ來り會すと雖、艱難のときは、親友ならでは、來るものあらざるべし。而るを、女子は、外面のみ親しき知人に狎るゝことと、男子よりも速にして、一朝、其の眞相の顯るゝに至らば、亦怨むこと、反りて、男子より大なり。然れども、其の反動に、女子交際上の通弊は、或は疑ひ、或は嫌ひ、或は憎むも、往々、由なきことあり。戒

己を得、以て、己めざるべけんや。

以上の條項を參考し、謹みて、交際せば、良人の爲には、好知己を得、以て、己も、共に、世路の難を救はるべし。兒女の爲には、良朋友を得、以て、將來の發達上、少なからざる裨益あるべし。然れども、多くの女子中には、其の家に對して、有益の人の來ることとあるも、之を、五月蠅と思ひ、怏々たる顏色以て、火鉢を出だし、何事か謡きつゝ、茶杯を持ち出づるものありとかや。果して然らば、志の壯なる人、又、其の閾を踏まんや。抑、女子の交際は、己一個の交際を主とするものにあらずして、親の爲、夫の爲、且、子のため、其の交際を、間接に補佐して、圓滿ならしむることを專にせざるべからず。故に、有德の來賓、門を叩くこと、漸、稀なるに至る家は、其の基は、多く、內裏を修むる女子の、未、

人に接する法を知らざるに坐するものと云ふべし。之と同時に、良人の、悪人と結び、家兒の、放蕩者と契るに至らば、其の女子、亦、未、交際の本面目を知らざるものとの責を免れず。

凡、交際の秘訣は、ことさら、馳走をなし、以て、目前の世辭を言ふ如きものにあらずして、好し、客に、飲けたる茶碗もて、粗茶を進め、綻びたる蒲團に坐せしむるも、歡迎の情、勃々と、顔面に顯れて、之に接せば、忽、人をして、一見、舊友の感を起こさしめ、遂に、其の交や、永久解けざるに至るべし。蓋、男子は、外出多きものなれば、女子たるもの、恒に、内にありて、諸の應對をなし、是より、一家の人望を作り、その家の信用を高めざるべからず。思ふに、交際の機會は、些少の事より發するものなり。不和も、亦然り。例之は、隣家の小兒の

頭を撫で、必生の相識となるあり。或は、犬猫に、水を灌ぎて、終生の仇敵を作るもあり。實に、交際はかり、奇妙なるものはなし。女子の癖とて、客の袖裏を窺ひ、縞目を眺め、陽に謙退して、陰に、其の反對の意を含め、甚しきは、公然、得々として、自慢話をなし、或は、知人の短所を數へて、愚弄する抔は、人の心服を得る所以ならんや。誰か、人を切る刄を見は、亦、巳を害するものと思はざらん。

若し、客に、飲食を進むることあらば、食ひ易くして、而して、消化し易きものを撰らぶべし。貴女に、餅を進め、老人に、蛸を呈する抔は、客に接する拙きものゝ、往々なす所なり。別して、我が國は、禮義に厚き國なれば、贈與の繁き、外國に於いて、比類なき程とかや。然れども、禮の弊は、煩なるのみなら

ず、動もすれば、虚禮に流れんとす。故に、之を主る女子たるもの、工夫せざるべからず。夫、人に、物を贈る目的は、財を與ふる爲にあらず、實意を表する驗なり。是を以て、輕少なりとも、國産等を、人に贈るは、下流社會は兎も角、高尙の人は、高價の品を贈られしより、悅ぶこと大なり。勿論、人の大禮には、習慣に從ひて、贈與するを良とす。近來、日本流の贈與を笑ひて、之を顧みざる洋僻者多し。然れども、儀、物に及ばざるを、不享となすと云ふ古語を忘るべからず。

既に、女子は、人と交際せざるべからずとせば、從ひて、女禮を講ぜざるべからず。抑、女禮は、女子の、人に接するに當り、女子本來の尊敬の心念と、靜淑の擧動とを以てすれば足れり。決して、奇に、体を容づくり、ことさらに、

聲を、妙にするを以て、禮と誤了する勿れ。禮の本は、禮記に、忠信、禮之本也。義理、禮之文也。とあり。以て、參考すべきなり。然らば、禮式の作法は、心の敬を顯するに過ぎざれば、如何なる作法にても、妨げざるに似たり。今の禮を論ずるもの、多く、內心を先にするを忘れ、外容のみに傾くは、遺憾なり。

史談

原宗右衛門の母

三橋要也

原宗右衛門元辰が、赤穂の義士四十七人の中にて、すぐれて、忠義心の深かりしは、誰しも知れる事なるべし。こは、もとより、元辰が性質にもよりぬべけれど、亦、その源づく所あるなり。元辰に、母あり。その名こそ傳はらね。赤き心は、日月と、光を爭へり。

はじめ、赤穂の城主淺野長矩の、吉良義英の爲に恥しめられしをもとにて、遂に、そ

の身をうしなひ、その國を沒さるゝに至りしとき、家老大石良雄、元辰等と共に謀り、竊に、そが仇を報いむとて、良雄は、京都に上りて住まひ、元辰は、赤穗に隱れて、時を待ち居たり。良雄、事はからむとて、書して元辰を召しぬ。元辰、さては、志果たさむ折の至りぬるぞとて、うちたゝむとし、何げなく、母にうち向ひて、「いさゝか事の侍れど、今より、京都までところ思ひたちて侍れ。事がらによりては、直に、江戸に赴かむもはかられ侍らねど、二月を過ごさで、必歸り參るべし。しばしの暇賜はりて、御心安く待たせ給へ」と言へど、母は、いかゞ思ひ居けむ。「汝、もし、江戸に赴きなば、いかでか、再歸り來べき。されど、永き別れともなりぬべし」といふ。さては、はかり居つる事ども、母君には、かねてより知ろしめしけるにやと、心ひそかに驚きつれど、猶も、そのさま見ねじと、また、何げなくもてなしつ。母、重ねて言へるは、「世々、君の御恩を荷へる、人の臣たる身が、君の御爲に、命を棄てむは、常の道ぞかし。汝が武士の道に死にたりとて、我、いかでか哀み思ふべき。もし、怯れ心に、命惜みして歸り來なむには、我は、不忠ぬ臣は、子とも思はじ。ふたゝび、汝を見ざるべし」と言ふ。元辰、今は、かくすもせむなしとて、「實は、母

君の知ろしめしつるが如く、我等大石とはかりて、仇かへさむと企て侍りぬ。されど、ひそかにせでは、事なるまじとて、親子の間にも告げ知らせじと、かたく、人人と誓ひつれど、今日まで秘め置き侍りしこそ、いと、無禮には侍れ。これも、なき我が君への心盡くしと思し給ひて、許させ給へ。さるにても、國は亡び、家は破れぬるに、母君の御年波は、いや高し。我が亡きあとに、誰かは養ひ奉るべき。こゝを思へど、胸もはりさくるばかりにこそ」とて、うちすゝりて泣き出でぬ。

兼ねてこそ、かくとは、推し量り居たれ。並々の女情ならど、老いゆく先の一本杖と、頼みにたのみし我が一人子の、死出の旅路の門出なりと思ひなば、いかでか、哀しさに堪へらるべき。されど、元辰が母には、忠義より外の心なかりしなり。この言葉を聞くより、いたく腹立ち、聲あらゝげて、「汝、かほどの道理に迷ひぬるか。君につくすと、親につくすとは、もとより、兩つながら全くすべからず。今、君の御爲に盡くさむとて、老い朽ちし母が身に心殘して、人の臣たる大義をふみ過るべしやは。何とて、疾くは徃かざるぞ」と、怒れる聲は、涙と共にはとび出でぬ。元辰、この一言に勵まされ、利心おこしていで行きけり。

かくて、京都に上りつるに、折しも良雄、病にうちふしけれど、心を盡くして看護りしに、やがて愈えたり。さて、良雄がいへるは、「すべての事、速にするときは敗れ易し。ましてや、かやうに重かる事をば、たゞ、心しづかに圖るべし」といふに、元辰も、「げにも」とて、京都にて、あまたの日數を過ごしゝが、母を戀ふる心に堪へがたかりしかば、かくと、良雄に告げて、一たび、赤穂に立ち歸りたり。母怪しみて、そのよしを問へるに、「大石が病にかゝりて、江戸發足の程も延びて侍りぬ。御ありさまの、あまりにおぼつかなく覺え侍れば、今ひと度、御けしき伺はゞやとて、暫し立ち歸り侍り」と答へぬ。恙なき我が子の姿を見つる心は、飛びたつばかりもうれしかりぬべきを、母は、また、何思ひけむ。いふこともなくて、やゝ久しく考へ居たり。元辰は、ひとりうれしさに、酒肴とうでゝ、母に參らせ、自も飲みて、かたみに、よろこび語らひつゝ、うち興じけり。

夜ふけて、母は、ふしどに入りぬ。翌旦、日たくるまで起きいでぬこそ怪しけれ。あまりに、心にかゝりけれど、嫂して見させつるに、あはれや。刄に伏して死り居たり。かねてより、かくとは思ひ定めしなんめり。元辰、屍にとりすがりて、泣き哀

しめども、せむすべなし。さて、何故に、かくはなり給へるぞと、傍を見れば、一通の遺書あり。涙おしはらひて讀み下せば、「汝が、京都に上らむ折、忠孝の兩ながら全くすべからざるを誨へつる言葉の數々は、耳にも留りつらむ。さるを、今、我を思ひて立ち歸り、志の立たざること此の如し。かくては、たゞに、君の讎を復し得られざるのみにあらず、祖先の名をさへ汚しつべし。されど、我、まづ死にて、亡き我が君に見え奉らむとはするなり。あはれ、かの吉良は、汝が君の仇たるのみか。また、汝が母の仇なるぞ、必ちかひて、彼をうち、ゆめ〳〵おくれをなとりそよ」と、理あるく認めたり。元辰、ます〳〵哀み號びけれど、我が身の過、今更に悔いても及ばざれど、是よりは、ひたすらに、忠義心を固め、遂に、機を得て、四十餘人の者どもと仇を復し、その名は、天が下にかゞやくに至りたり。さても、古の人は、身を殺しても、その子を教へたり。今の世の人の母たるもの、この覺悟ありや。いかに。

初女の貞操

上野弘道

初は、相摸國津久井郡若柳村の百姓孫四郎の女なり、孫四郎は、初のほかに、子といふものなかりしかば、初が十八歳になれりし時、同じ村の治兵衛といふを迎へ取りて、家を繼がしめけるに、いつしか、男子生まれて、これより、家内五人となれり、初夫婦は、その中らひ、いと睦ましく、わづか計りの田畠なれど、專ら耕作に力を盡くし、老いたる父母に、まめ〳〵しくつかへ、稚き子をはぐゝみ、月日を送りけるに、弘化二年十月の頃より、夫治兵衛、持病の痰症、はげしくおこりて、病勢、ほと〳〵、危篤に至らんと見えしかば、初は、晝夜、寢食をわすれて、醫を迎へ、藥をすゝめ、朝夕、心を盡くして、療養怠らざりしに、その驗なくて、つひに、空しくなりにけり、初が愁傷おほかたならず、たゞ、うちふしてのみ泣き叫びゐたりしかど、さてあるべきにあらねば、みづから葬事をいとなみ、後のとぶらひ、いとねんごろにしけり。その頃しも、懷妊なりしに、同じき三年の二月に分娩して、女子をうめり　去年より引き續きたる病中の藥餌喪祭の儀節に用ゐし所の金錢も、みな、これを人に借りて濟へ、かつ、出産の費用もかゝりて、多くの負債となりしかば、さらでだに貧しき家なるを、二十のうへを、ふたつみつ越えて、かよわき

女の身の、いかでか、これに堪ふべきと、近隣の者も、あやふみしかど、初、志を屈せず、夫のなくなりしより後は、翠髻を、みだれしまゝに取りあげず、脂粉も、また更に粧はず、たゞ、兩親につかへ、兩子をそだて、耕作の時を失はじと、千辛萬苦の勞をかさねけるを、治兵衛の兄、與五兵衛といふ者、これをみかね、或時、初が家に來りて云ひけるは、汝、かくの如く、姿を窶し、身を凝らして、はたらくとも、女一人の力もて、兩親、兩子を養はんこと、いとおぼつかなし、かつ、いまだ、若き身なれバ、これより、ゆくすゑ、長きとし月、つひには、操も建てとほしがたきが、なべての世のありさまなり、弟の死しより、はやく一朞の期を過ぎたれど、後夫を迎へて、共々に稼ぐべし、幸、こゝに、年齢も、汝にあはせてよきほどなるものあり、われ、此の人をと思ひ定めたり、そのよし、親たちにもかたらはんと、今日はふりはへ來りたりといへりければ、初、涙をはら〳〵とこぼして、のたまふ如く、夫のすぎしより、親と子とのあつかひ、妾ひとりが力にては、不足がちの事のみなれど、苦しき中の樂は、子供を、夫のかたみとおもへど、勞も、さのみ身におぼえず、たゞ、苦を樂として、ふた親に仕ふるが、妾が願にて、これを、女の道と

おもへり、今更、二人の夫にまみえ、また、あらたに、ひとつの苦をそへむや、ふたゝび、此の事のたまふなど、いなみて、更にうけひくべくもあらぬを、與五兵衛、かれこれと、詞を盡くし、汝、いま、わがいふ言をきゝいれずば、後に悔ゆることありなんと、はげしく説き喩したりしかど、初、涙をおさへ、ふとたちしが、たゞちに、閨中に入り、剃刀もて、髮切りおとし、長き髻を、そのまゝに、與五兵衛が前におき、妾が志、かく決めたれど、兄上、かならず、行末をおぼつかなみ給ふべからずと、辭色たゞしくいひたりしに、與五兵衛も、感に堪へず、赤面して去りしとぞ、初、それより、いとゞ心を勵まし、ひるは耕し、夜は績して、夫のありしときよりは、なか〳〵、やすらかに暮らしけり、父孫四郎、その性頑にして、家の有無も顧みず、常に、いたく酒を嗜みしも、初が行狀に感じて、しば〳〵、飲むことを斷たむとせしを、老いたる御身もて、好み給ふ酒をとゞめ給ひなんは、保養の道にあらずと諫めて、それより、日毎に、少しづゝ買ひ求めて、貯へおき、父の身を終ふるまで、一日も、酒を闕きし事なし、また、田畠に出づる時も、父には、重き荷を負ふせず、みな、自、これを持ち運び、暇あれど、人の家にも傭はれゆきて、

晝夜いたづきし甲斐ありて、昔に引きかへ、家産も、やゝ豊になりて、上納の租賦は、更にもいはず、家内の衣食も缺くることなくなりしは、全く、初一人が、至誠の致せる所なり、そも〳〵、女の盛といふは、十七八より三十歳までなり、さかるを、初、そのさかりのはじめに、夫をうしなひ、それよりこのかた、容色を修はずして、耕織をのみ務とし、久しき歳月をすぐしゝは、類まれなる婦ならずや、右は、明治孝節録中にものせられしものにて、誰人も、知らざるはあらざめれど、その貞操のほど、あまりに愛でたければ、書き取りて、貴誌におくるものぞ、

家政

育兒小言（三十六）

武谷水城

就學の事

大抵人生れて、六歳の頃になる時は、始めて讀書數字等の初歩を習はしむる事、東西古今同じきが如し、支那の古は、六歳の正月、始めて一二三等の數と、東西南北

の方の名とを敎へ、八歳にして始て小學に入り、前年より幼者相當の禮義を敎へ、九歳十歳よりして、讀書算法等を學べり、羅馬の如きも、王政時代には、六歳にして始めて、小兒の學ぶべき科を定めたりと云、現今我邦にては、四歳にして幼稚園に就くを得、滿六歳にして小學に入る制なり、其敎育の程合等も、皆小兒の身智の發達の度に應じて、定められたるものなるべしと雖、母親たるもの、亦其兒就學の方法程度等に就て、常に注意する事肝要なり、

現時の小學に入るべき年齢までは、小兒の腦の發育、未だ硬固ならず、僅の刺戟感動に由りて、種々の器質的、及精神的の異常を誘起し易きものなれば、寧ろ科業の不及に失するとも、決して多きを科すべからず、況んや、未だ學齢に達せぬものに、強て讀書其外の科業を習得せしめんとするが如きは、宜しからず、尤學齢に達しなば、勿論就學せしむべしと雖、此頃までは、猶學校の敎育よりも、母親の敎育肝要なる事を忘るべからず、母親の敎育は專ら愛を用ゐて、心情の敎育を旨と爲し、小學校は主に規則に由りて、心情と學術との敎育を司るものにて、

維新前迄は、各藩學校の敎育、いづれも忠孝節義等心情の敎育を主と爲し、藝術

の如きは一の末節たりしも、維新後歐洲の學風入るに及び、舊物を一掃して、學校の教育は全く學藝の上に限られ、德育上の事は、亦學校の關する處に非ず、國の一面のみを見れば、科學の進歩と、權義の發達せしが如き景像とを認るも、同時に他の一面を望まば、前路大患の横はるものあるを、雲霧暗憺の裏に認めん、只、近年小學校に、心情的教育の容れられしは、國家前途の爲にも、僅かに愁眉を開くべきにや、

六七歳までは、決して學校の規則にのみ一任すべからず、學校に就學せし後も、母親は常に其科業を助けて、及ばぬ所を補ふべし、

小兒小學に入るまでには、幼稚園にて、相當の教育を受るを得れ共、未だ此園の設なきか、よしこれあるも、小學に入るべき頃にもならば、母親は先其準備として、(幼稚園に入り居るものは、其習得せし事柄を能く試み、及バぬ所を助くべし、)簡易なる讀本の讀方、文字の書方、又は算數の初歩等を、少しづゝ教ふべし、文字を教ふるには、母親先、石盤又は紙の上に字を書し、小兒をして其上をたどらしむべし、讀方を教ふるには、短くして面白く、解し易き文章の一節を、反復教へて能く暗記せ

しめ、又は事物の名稱、簡易の史談、古人の善行嘉言、又は歌、或は物語などの、意を咶し聞せて、時々復活せしめ、時々問題を出して、記憶せしまゝを答へしめ、或は自ら思ふ事を書かしむべし、答解能く出來し時は、褒詞を與へ、若くは適宜の賞品を與へて獎勵すべし、斯く爲す時は、小兒は喜び勇みて、學び覺ゆべし、此くして、學齡に達し、學校に就く時は、初め幼稚園に入らざるも、小學下級の敎育を受るに差支なく、小學教員も亦敎るに手數を要せず、其學業の進步の早く、小兒は益進取の氣象を發起すべし、若し小學入校の前、毫も讀書習字其他科業の心得なくして、頓に就學せしむる時は、居所も行爲も、全く從前と習慣を變じ、初めて讀書算術をも學ぶ事なれど、俄に理會する事難く、忽ち厭惡の念を生ずべし、一度學業を厭ふ念生ずる時は、進取の氣象挫けて、學事進步せず、終身の累と爲りぬべし、此等の結果は、皆入學前、家內にての就學準備の如何に依る事なり、

右の如く就學の準備を爲し、學齡に至らば必ず就學せしむべし、中には、自家にて敎育する人無にしも非ざれども、こは易き業には非ず、且學校の通りに規則正しく敎授する事も、到底出來得るものに非ず、又少しく富有の家には、敎員を聘して小

兒の教育を托するもの有、是等は小兒に學問の貴きを知得せしめず、其進みを妨げ、志を荒らさしむ、益ある事に非ず。元來人は進取の氣象に富るものなれバ、小兒學校にて、種々の兒童と一所に集りて、共に學ぶ時は、互に競ひ合ふ意を惹起す事強く、爲めに學業も進み、品行も良と爲り、進取の氣象も益發達して、益を得る事少からぬなり、

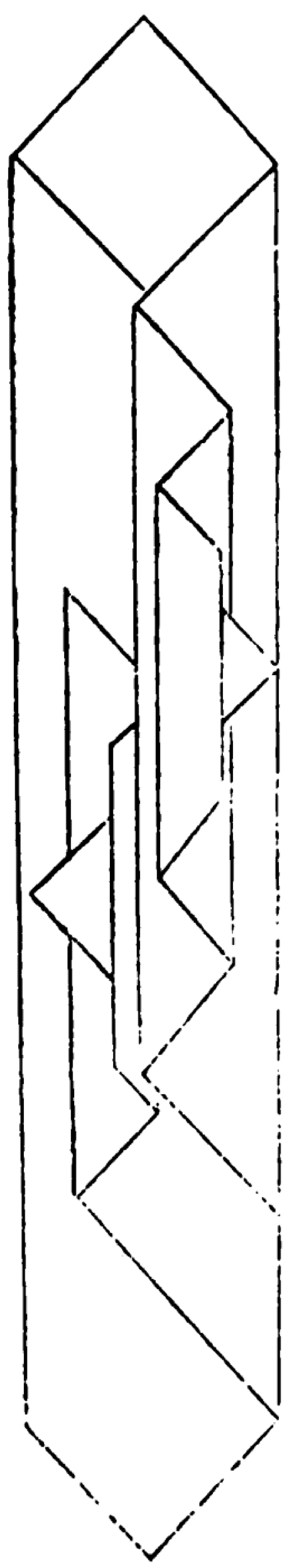
折形（三）

有住齊

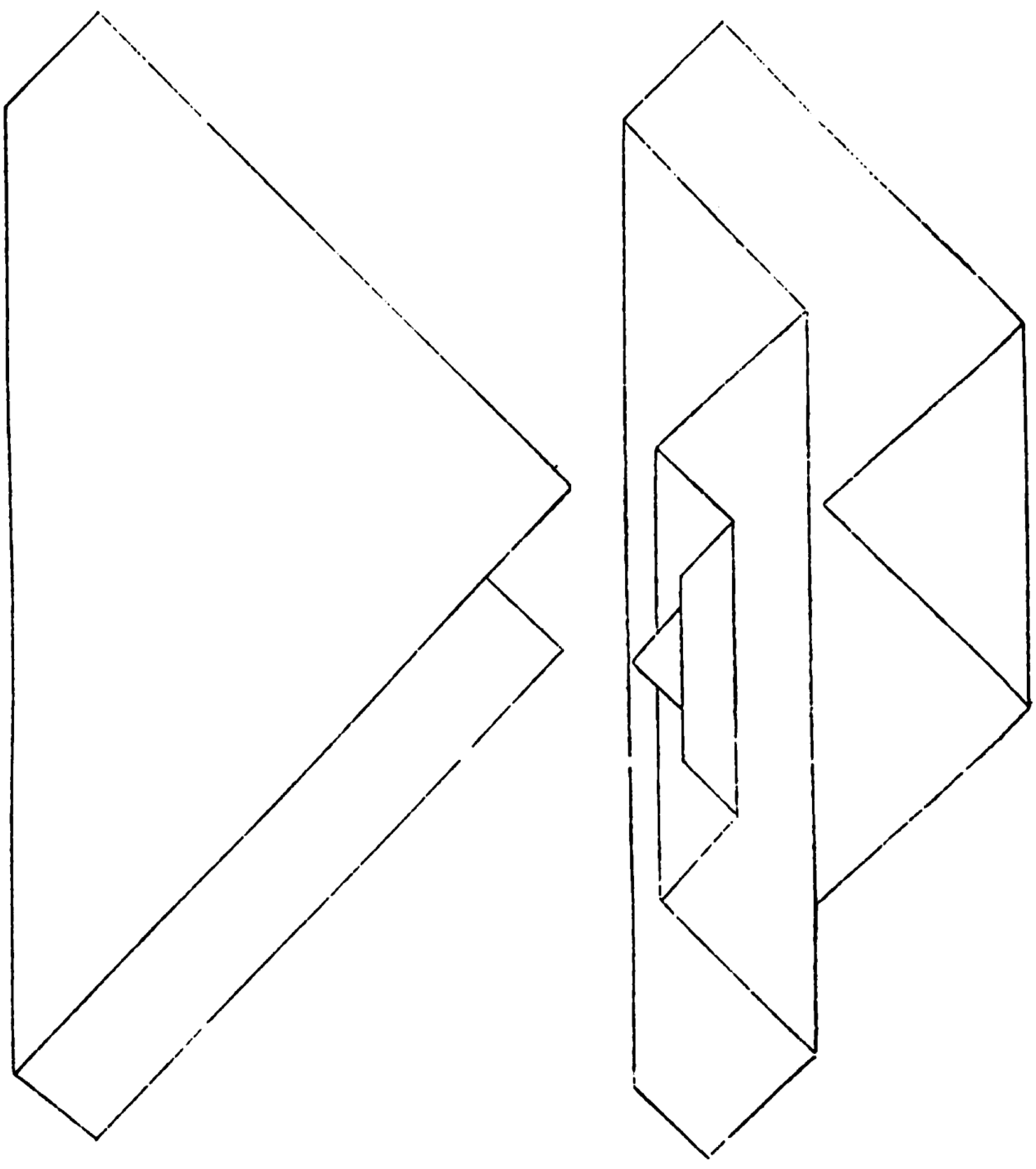
一昆布包

法中入院などの義に用ゐる也、昆布は二本、又は三本の間也、水引掛ける事、前に同じ、書付はなし、

昆布包



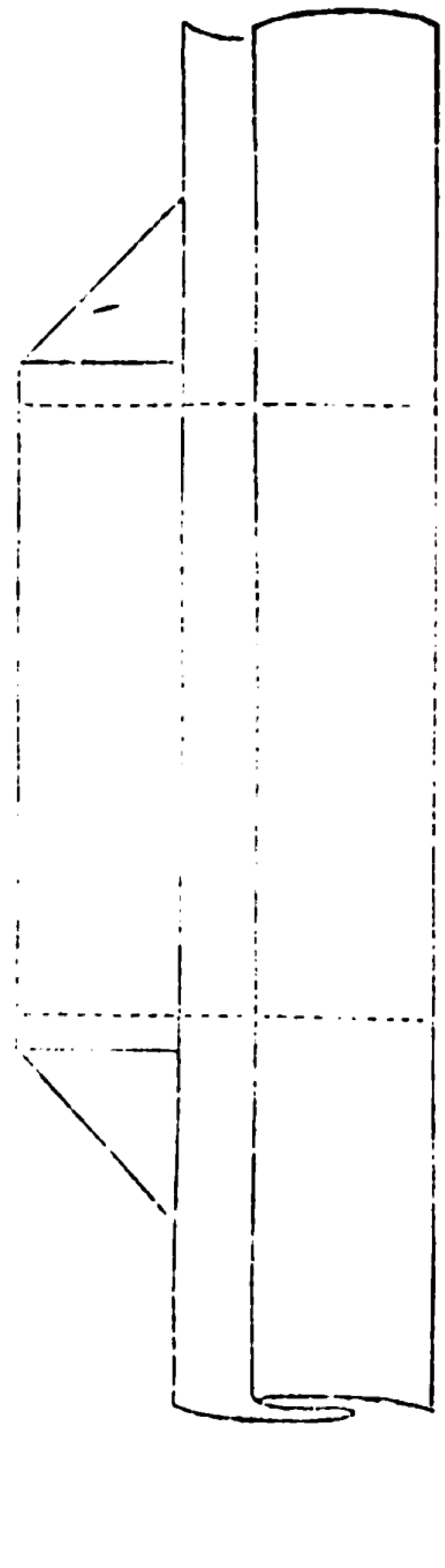
解



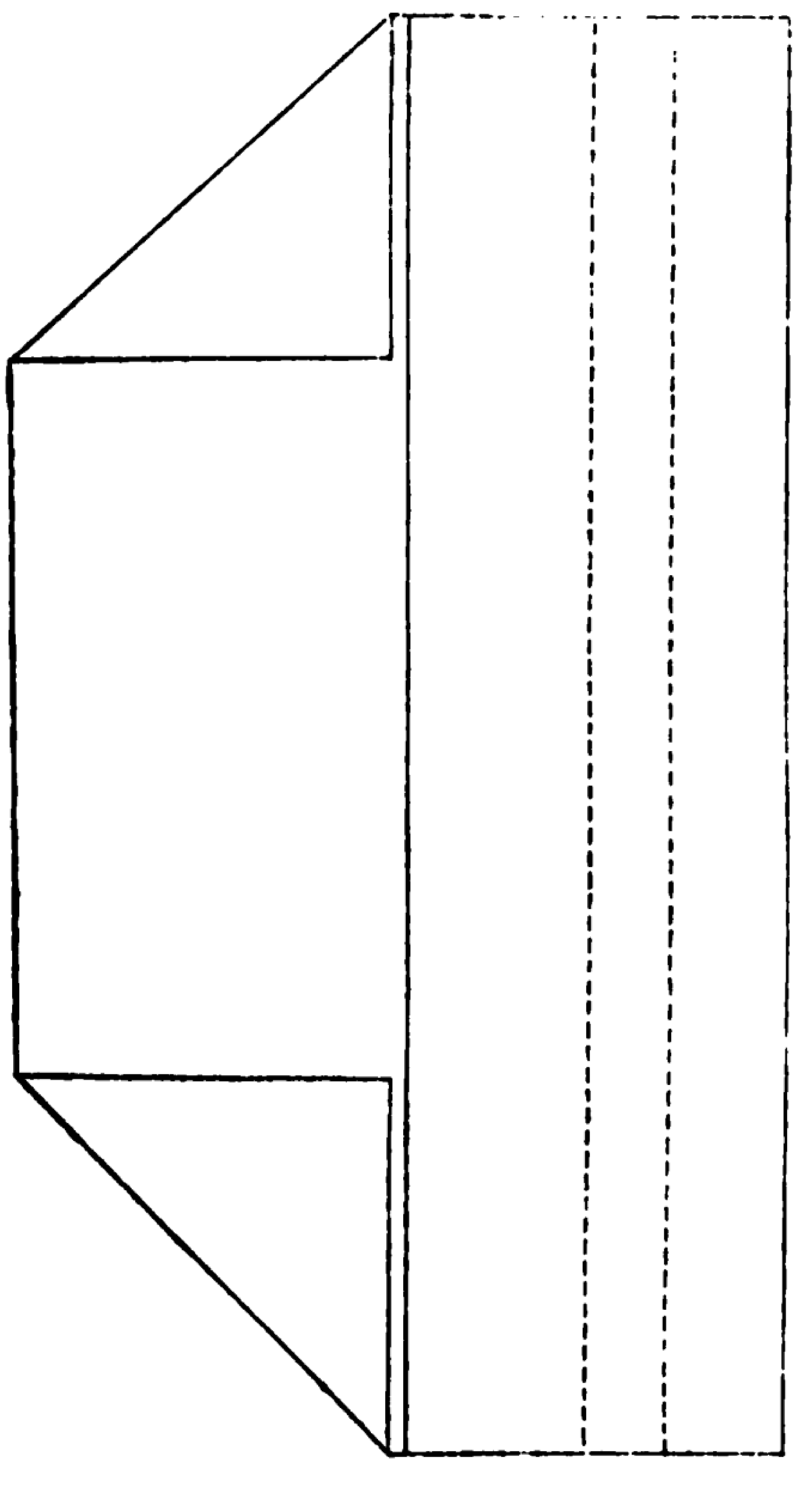
一大豆粉包

年始の鏡餅、又皆子餅などに副ふる也、大豆粉は、青にても、白にてもよし、下包なし、水引掛、書付はなし、

大豆粉包

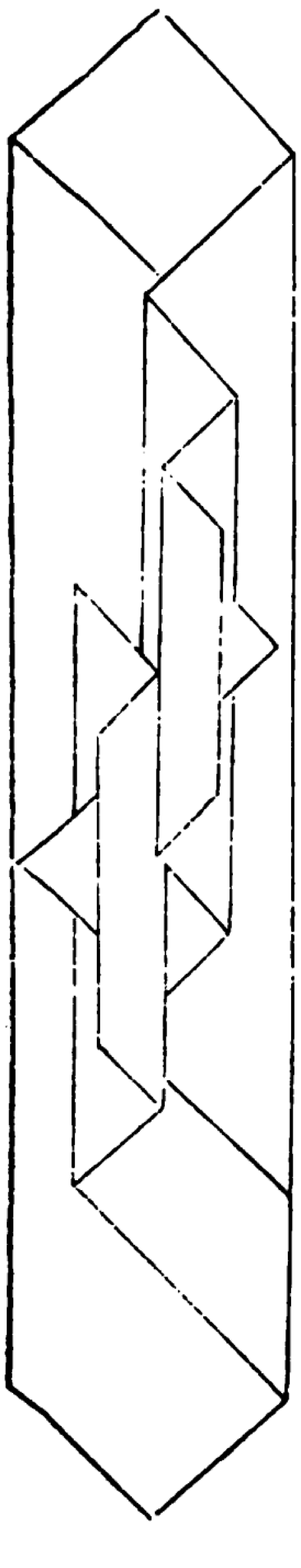


解



一眞胡麻塩、草の胡麻塩包、胡麻塩を摺りて、遣ふは、後世の事也、赤飯強飯ともに添ふる也、是も下包なし、水引掛、書付なし、草も手輕の方へ遣ふ也、

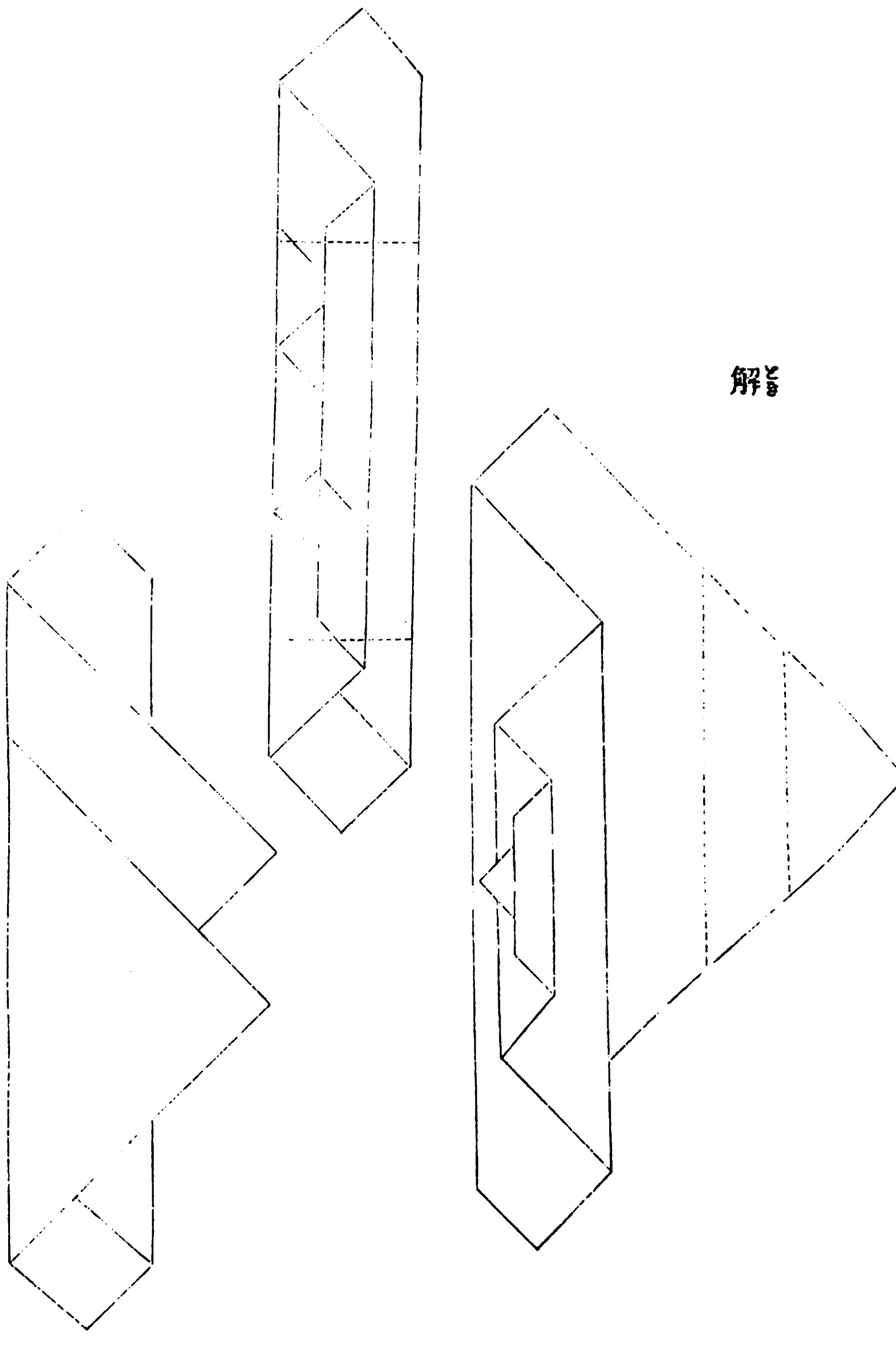
眞胡麻塩包



草胡摩塩包

解

解



看護法捷徑（二十六）

三笠舍主人

第三編　救急法（つゞき）

（七）創傷

一　創傷とは、外より來る劇力に因て、身体の一部毀傷せらるゝものゝ總稱にて、其創を受る物質の種類、鋭鈍、力の强弱、受る部位の異る等によりて其種類、輕重、一樣ならず、

二　鈍なる器物にて打るゝか、若くは之に衝突して、受る創を打撲又挫傷とも云、之れ皮膚破れず、皮下の軟部のみ損傷するもの也、其皮膚と共に破るゝものを、挫創と云、又鋭利なる刄物にて受けたるを切創と言ひ、皮膚を直線に刺入したるものを刺創と云ひ、皮肉の一部斷裂するものを裂創と云ひ、異物の体内に射入したるものを射創と云、其他、捫挫、脱臼、骨傷、等あり、

三　創傷を受たるものある時は、直に醫家に送り、若くは其診を乞ふべしと雖、先づ創傷に害なく、醫の治療を施すに妨とならざる所置を施して、一時の危急を救ふ

事、最も肝要なり、

四　打撲を受けたるものは、先づ患部を安らかに保持し、其部に冷水罨法、若くは氷水罨法を十分に行ふべし、

五　創口ある諸種の創には、汚物の創内に入るを防ぐを、第一の要件とす、されバ、決して妄りに手指を創面に觸れ、若くは陳き手巾、海綿、又は紙にて創所を拭ひ、或は汚水にて洗ふ等の事を爲すべからず、

六　創所清潔なるものは、妄りに洗はぬを良とす、若し不潔なる時は、冷湯（一回沸水を煮て冷したるもの）を灌ぎ、手巾等の新らしきもの、若くは新に洗濯したるものを用ゐて、細かに洗ふべし、冷湯を得難き時は、清潔なる井水、泉水、河水、又は海水を用ゐるべし、爾後、冷湯若くは清水に浸せる布片、又は手巾を創上に貼し置きて、醫の診斷を俟つべし、但、繃帶あれバ、其上を輕く卷きて固定し置くべし、此時注意すべきは、最初先づ、看護者の手指を十分に清淨に爲す事なり、手指不潔なる時は、創を惡くする事甚し、恐るべき事也、

七　創所を洗ふに、若し手近に防腐藥ある時は、冷湯又は水より遙かに優れり、され

共、此等の藥は、元來毒性のものなれば、之を用ゐるには極めて注意すべし、通常、五十倍石炭酸水、(石炭酸一分、水四十九分)同量の硼酸水、又は三百倍のサリチール酸水、を製して不慮の用に貯へ置き、用ゐるに臨て、等分の淸水(一回煮たるものを良とす)を加ふるを良とす、則上の分量の一倍稀薄と爲るなり、

八　創口より出血する時は、一時之を止る事肝要なり、又創口に血液凝着するものは、其儘に爲し、醫の診察するまでは剝すべからず、强て剝す時は、再び出血の虞あり、(止血法は後に出さん)

九　捫挫とは、傾跌、欲側、撞突、等の爲めに、關節の運動常度を超え、脫臼せんとして漸く舊位に復したるものにて、其部腫起して痛を發し、治療法を得ざれば、關節半は强直して、運動を妨るに至るもの有、此症に罹る時は、直に其部を冷却し醫の診を乞ふべし、

十　脫臼とは、關節を作る二個の骨端、打撲、撞突、等の爲に脫離して、位置を變ずるものを云、此症を興したる時は、其部腫脹し、共關節の運動全く廢止するか、或は運動の形狀を變ず、(健康例と比較すれば著し)試に關節を運動せしむるに、劇

痛を發す、

十一脱臼を與したる時は、先患部を適宜の位置に安保して、冷水罨法を施すべし、時を經る時は整復し難く、終身不具を貽す事有、但、脱臼の整復は、醫に非ざれば爲し難し、速に手術を乞ふべし、

漬物鹽加減（六）

駒込亰軒

糸瓜糟漬

糸瓜の花落二寸位の所をとり、粕に食加減の塩をまぜて漬けるなり、尤、押蓋ぞつかりとして、水のあがりたらば、桶をかしげてこぼすべし、是、へちまの塩水なり、水氣なきやうにして蓄ふべし、又、余蒔胡瓜も、かくの如くにして漬置くべし、

胡蘿蔔味噌漬

にんじんのわとさきを切り、五六日、風のすく所に置き、甘塩にして漬けるなり、三四十日たちて、一日日にほして、みそにつけ更へるなり、又、粕漬にするには、塩をからめにして漬けるなり、

十六さゝげ粕漬

さゝげの、餘り實のいりすぎぬうちにとりて、生のまゝ、粕につけるなり、眉兒豆などは、殊更、さやばかりの内に漬込むなり、上に水出でたらば、またみとるべし、

天王子蕪

蕪の莖一寸計り附けて、甘塩に押つよくかけて漬置き、さて天氣よき日、一日かわかして、味噌にも漬け、粕にも漬けかへるなり、何れ百日余も經ざれば漬きがたし、

梨粕漬

あわゆきの無疵なるをえらび、梨と梨とすれ合はぬやうに、粕澤山にして漬けるなり、

柿粕漬

はちやといへる細長き柿の青きうちにとりて、粕につけるなり、自然と澁ぬけて甘からず、甚よき風味なり、會席の香の物に附合はす、

柚青漬

柚の實のいらざる青きうちにとりて、かんてんをながして、灰のあくを附けて、き

なこ團子のごとくして、つぼにいれ、めばりをして、たくはふべし、遣ふ時、ぬるま湯にて洗ひおとさば、にはひもうせず、いろもかはらず、もぎたてのごとし、

金柑鹽漬

金柑の、余り熟さぬうち、水と鹽と等分にせんじ、一夜さまして器に入れ、きんかんと、ぴた〳〵にして、かせのいらぬやう、目ばりをして、かこふべし、遣ふ毎に、うは水をこぼして、ひた〳〵にしておくべし、いつまでも、もつものなり、

笋鹽漬

竹の子の皮をむきて、澤庵大根のごとく、一かはづゝならべて、鹽をふりて、中鹽にして、かろき押をかけて漬けるなり、尤、たうがらしを、少し入置くべし、

（をはり）

學園

日本文典（つゞき）

杉谷正隆

上二段活は、例へバ、起きと云ふことゝの上一段活の如く、起きさせ、起きさせ、起きさす、起きさする、起きさすれど、うつり活くが如し、之を、圖に示せバ、左の如し、

起き、掘じ、落ち、戀ひ、恨み、報い、懲り	させ	させ	さす	さする	さすれ

下二段活は、例へバ、得といふことゝバの上一段活の如く、得させ、得さす、得さす、得さする、得さすれど、うつりはたらくが如し、之を、圖に示すときは、左の如し、

得
受け

爲・捨て・寐ね・經・褒め・消え・枯れ・飢ゑ	させ	させ	さす	さする	さすれ

加行變格は、例へば、來と云ふことばの上一段活のごとく、來させ、來させ、來さす、來さする、來さすれど、うつりはたらくが如し、之を、圖に示せば、左の如し、

來	させ	させ	さす	さする	さすれ

但し、此の格は、右にあげたる來と云ふ語の外はなし、

佐行變格は、上の下二段活の圖中にあげたる爲と云ふ語と同じ格なれば、こゝには略す、彼に準じて知るべきなり、

偖、(一)の、せ、せ、す、する、すれは、下二段の佐行の、せ、せ、す、する、すれと同じはたらきなれど、下二段活に轉用する格としても、別に疑ひなかるべけれど、(二)の、させ、させ、さす、さする、さすれは、下二段活の佐行には、さる格なし、然るを、下二段活佐行に轉用する格として、此處に、せ、せ、す、する、すれと、相ならべて擧げたるは、初學の徒よは、聊疑なきこと能はざるべし、故に、今、此處に一言して、其の疑を解きおくべし、そも〳〵、せ、せ、す、する、すれは、例へば、四段活加行の、行かせと云ふは、もと、行きといふ語の語尾のきを延べして、かせとしたるものにて、行かすは、行くといふ語の語尾のくを延べしたるものなり、されど、其の延べしたる語尾の、行かせ、行かすは、下二段活の、せ、せ、す、する、すれと同じ語尾なれど、四段活の第一段將然格の、行かより轉用さするなり、他の行の轉用したる故も、皆、此の如し、されど、行かせ、押させ、打たせ、往なせ等を約むる時は、行き、押し、打ち、往にとなり、又、行かす、押さす、打たす、往なす等を約むる時は、行く、押す、打つ、往ぬとなるなり、故に、此の轉用格の、せ、せ、す、する、すれは、もと、語をのべたるところの活なり、させ、させ、さ

す、さする、さすれも、これに同じ、此は、もと、せ、せ、す、する、すれを延べて、させ、させ、さす、さする、さすれと云たるものにて、之を約むるときは、もとの、せ、せ、す、する、すれとなるなり、故に、此の二つのものは、もとより同じきものなるが、作用詞の活のことなるによりて、二つにわかれて、四段活は、もとの、せ、せ、す、する、すれと轉用し、他の活は、其を延べたる、させ、させ、さす、さする、さすれと轉用することゝなりたるなり、右の如き譯なるを以て、此處に、仝じく、下二段活佐行に轉用する格として、語尾の異なるにも係はらず、擧げたるなり、又、次の下二段活良行に轉用する格の、れ、れ、る、るゝ、るれ、られ、られ、らる、らるゝ、らるれも、同じ意なれば、其の心して見るべきなり、

手紙の事

難波津生

昔の紫式部は、光源氏の物語を作りて、其文才の秀れたるを譽められ、日本紀の御局とあざなをのこしたりとか、近き頃荒木田の麗女といひしは、水鏡、大鏡、増鏡とて、假名文の歴史あれど、猶闕けたる所あるをなげきて、月の行へ、池の藻屑と

いふ二書を書きて、之を補ひしとぞ、其他種々の書をあらはし、殊に歌をよむことに秀れて、其名の千年の後に傳はれる人々いと多かり、女子文學傳をよみ給ふ人々はすでに知り給ふなるべし、

其人々の品位、心の賢さ愚さにつけて、さやうの方に長けて、今まのあたりはいふまでも無く、後の世長く、譽れをのこさんもいとよき事なり、されど高きも卑しきも、賢きも愚なるも、老たるも若きも、はた母とある人も妻とある人も皆書かではかなはぬものは手紙なり、如何ならん節にも、用ある人にさしむかひて、打かたらひたるのみにて事足りなむ、ともかくもあれ、事ありて旅だちしたる夫のもと、修行の爲に他所へ遣はしたる子供、隔りたる所に嫁きたるはらから、娘、さては又、親の御許へ節ふしの消息きこゆる其度毎に自ら行かるべくもなく、又使をたつべきにあらず、皆其事の趣きを手紙に認めて、云ひ送るなり、

上つがたにては召し使ひ給ふものに書かせても事足りなん、下がさもにても、近きあたりの人に頼みて、代筆させてもさしあたりての用は足りもやせん、されど人よ書かせたるものにては、我が思ふにかなはぬこと多きものなり、又親しき間なりとも打

とけていひがたきふしあらん、さるときには誰にか書かせん、はた其手紙を受け取りてよむ人の方にても、親しく本人の書きたると、人してかゝせたるとは、其情合のほどいたくことなりぬべし、たとへば遠き所にありて久しく對面せぬ母のもとより手紙のとゞきたらんには限りなくうれしかるべし、されど母のみづからかき給ひしならずば、其うれしさ何となく薄きものなり、又子の所より手紙を奉りたらんに、其子のみづから書きたるものならば、其手紙の書きぶり、文字のよしあしを見るのみにても學びのほど推しはかられて、母の心にはうれしくも、よろこばしくもありなん、まして何くれと認めたることゞも心ゆかぬくまなく、よく讀め、よくわかりなば、其うれしさよろこばしさも一入まさりぬべし、

されど親しき中にてはともかくもありぬべし、如何なる人とも知らぬものにても、文字うるはしく、事がらはきと認めたる文を見ては、まづ其書きたる人のこと思ひやられてゆかしくなつかしく思はるゝものなり、贈るときには、親しき人に贈りたるなれど、如何事よりして人の手にわたる事なきにしもあらず、さるとき文字つたなく、事がらもいとみだりならん文ならば、よし其書きし人の徳高く、才かしこきも

のなりとも、みさげられぬべし、手紙のつたなかりしが爲にみさげられたる事を聞かむ如何ばかり、はづかしく、くちをしからざらんや、がへすがへすも心すべきものは手紙なり、

さて手紙の事につきては、先に目黒先生の女子書牘文論とかもありたれど、なほ我心づきたること一事二事きこえおかんとす、うるさしとなおぼし給ひそ、これも此雜誌を讀み給ふ方々の爲にもやならんと思へばなり、

(一)よく讀むべきこと、人より賜はりし書はいふまでも無く、手紙の本にあるもの、はた雜誌などにみえたる古人のふみ、何れにても深く心をとめて、くりかへしよみおくべし、これやがて、我が書くときの稽古なり、是によりて書きかた、詞づかひ、禮式をもおぼえおくべし、

(二)殊に人より賜はりしものは、其文にかきたる用事のみならず、文字のかきぶり、詞のつかひざま、封じめ、上書きのしたゝめかた、印紙のはりかた、郵便局の消印までも注意して見るべきなり、

まづ郵便にて着きたる文ならむ、第一に宛名を見るべし、郵便局にては數多き中な

れど、他の家に配達すべきを、誤りて我家にとゞけおくことあり、さる物あらんときは早く郵便局へかへし遣るべし、宛名違ひなることを付札して郵便函になげ入れおきてよし、

次には脇付、宛名の脇に、無事とか、至急とか、親展とかあるべし、至急とあらバ、直に其手紙を開きて用事を見るべし、一時をあらそふやうなる事も其中にあるべし、親展、又は御直披などゝあるは宛名の本人自身にて其手紙を開けとの事なれど其用事には他人に聞かせてはならぬ事もあるべし、親展となくとも他人の手紙は開くべきものならねど、親展とあるは特に重きことなれど、たとへ夫に宛てたるものなりとも妻たるものは封をきるべからず、

次には差出人、特に其所書、

次には差出たる所の郵便局の印、差出人は早く認めおきて、出すことを忘れ、或は都合ありて數日以前の日付になしおくとも、郵便局の消印の日付は間違なきものなれど、それ等の誤りをも僞りをも、知る事を得べし、

次には消印にある地名、差出人の肩付には東京にてとありとも、郵便局の印に長崎

とあらバ、是差出人のいつはりをいひしなり、かやうの事まゝあるならひなり、中には旅などにては、認めたる處にて入れんとしてふとわすれ、次に着きし所にて入るゝ事あり、是等は惡意ありしにはあらず、又差出人の居る處に郵便局なくて近傍の村の局の消印あるもあるべし、一がいにいつはりのみとはいふべからず、

次に封じめ、郵便局にても他人の手紙は決して開くことならぬ規則なれど如何なる惡人ありて、さることをせずとも限り難し、封じも上下中とも心付けて見るべし、宛名、脇付、差出人、郵便の消印、封じめなど見たる上、さて封おしきりて、手紙を出してよむ、

まづ時候のあいさつ、自他の安否、次には用事、さて追而書き等次々によみ、次々に合點するはいふまでもなし、此等は誰しも同じことながらよく。注意して、まづかにとよむべし、なほこゝに一つの秘傳あり、大体の用事のみを合點しても、節ふし手紙より間違の生ずる事あり、それをすまじと思はゞ、其手紙の中にある用事の、日。づけ。、時刻。、場所。、人の名前。、間違の出來るは大方この四つをおろそかに見すぐすによりてなり、たとへば十月の十五日(日付)の三時(時刻)に本町の一丁目の二十一番地(場

所)山田太郎右衛門(人の名前)へ來るやうとありたらんとき、其中一つ間違たらむ如何、已がよく知れる所ならばまだしも、近き所ならば歸りて手紙を見直しもせん、何れにもせよ、人笑はれなる事なり、まして、知らぬ所、殊に遠きわたりならんは如何、道行く人に私の行く所は何處でありますかと聞きしといふ話あり、日付、時刻、場所、人の名前の四つの中をとりちがへなむ、さるをかしきこともありぬべし、をかしきことのみならず其爲に大變の不都合も出來ぬべし、我のみならず人にも迷惑をかけ、義理を缺くこともあるべし、

今一つは「參り可。申候」「參り不。申候」などゝあるこの不。の字、可。の字に注意する事なり、この二字の爲に大なる意味の相違あり、この不。の字の類を文典にてはうちけしといふ、うちけしの意味ありなしによく〳〵注意すべし、且うちけしは文章の終りのかたにあるものなれば、ふと見落すことあり、この日付、時刻、場所、名前の四つとうちけしとを注意するが、即ち余がいふ秘傳なり、この急處をおさへてよめばまづは間違をのがるゝ事を得べし、

さて用事のすみし上にも、なは注意あり、文字のよしあし、詞のとゝのひとゝのは

ぬ、紙、封じ袋などにも心をとゞめて、已が書かんときの手本にすべし、學校にてならひしときのみ稽古にはあらず、人より賜はりし手紙は永く殘しおき、それを手本として稽古すべし、尤其中のよき事のみをまなび、少しにてもあしき事はまねぶまじき事いふまでもなし、

又年經て後古き手紙をとりいでゝ、いとまあらんときに讀むは、一つのたのしみなり、手紙によりて古をしのぶはかぎりなく、興あるものなり、

なほ他人の手紙をよむに一つの注意あり、書きたる人の心をよく推しはかりてよむ事なり、

以上は他より手紙のとゞきたるときの事、

さて我方より人に手紙を差出すときには、前に述べたるが如く、同じく注意してかくべし、殊によむ人の上をおもひてかくべし、己が學問才藝のほどをあらはさんとてこと〴〵しく人知らぬ文字などかきちらしたるは甚あるまじきことなり、向ふの人によくわかるやう、無禮にならぬやうあるべし、

事がらおほきときは書く間につかいわするゝことあるべし、あらかじめ、別の紙に何

何の事、何々の事と、個條書にしておぼえおき、さて順序よく認むるもよし、文字をわすれたるとき、人に聞き、或は字引にて引はいふまでもなく、かなにてかきたるがよし、かなにて書くこと、決してはづかしきことにあらず、難き文字をかきたるはかへりて手紙の本意にそむきたる事なり、文字の難きが爲に、受けとりたる人え讀まで用事を闕く事、まゝあるならひなり、たとひ歌をよみ、詩をつくるやうの人なりとも、用事の手紙は其事がらの、讀む人にわかり、且無禮ならぬやうに書くべきなり、

申候をいひ候、差上候を遣り候、御前様を御前など書くこと返々すまじきなり、一字の爲に中あしくなり、親しきもうとくなることあり、呉々も心つくべし、さりとて餘りに尊敬にすぎたるも返りて又無禮なり、

常に心してていねいに書けど、其事ならひとなりて、改りたるときにも、書きやすし、常に粗末に書けば、又其くせとれがたくて、改りたるときには、心さわぎて、書きがたきものなり、如何なるをりにても愼みて認むべきなり、古歌にも

なほざりにかきなすさめそふでのあとは人のこゝろもみゆといふなり

尚、申すべき事あれどまたの節にゆづりて」

漫録

三卿三說（つゞき）

松野操雄

爲世卿の和歌庭訓抄は、前號にて終を告げたれば、本號より、爲氏卿の、初心和歌用意をものし、號を追ひて、定家卿の和歌庭訓を紹介せんとす。讀者諸氏、活眼を開きて、各、其の說のある所をうかがひねかし。

初心和歌用意條々　藤原爲氏卿

一可詠題事　結題の詞、字あるをば、心をめぐらし、詞を事とすべからず、たとへば、尋花、待郭公などの躰に侍る題にては、尋、待といふ詞を、いちじるくよまずとも、心は、ふかく尋ね、あながちに待つべし、ないし、又、となし、近しとあらん詞の字、以之可被准歟、故禪門、遠山雪を、

　風さそふくもゝ外山にまぐれけり
　　かさなるおくの嶺のしらゆき

風躰雖不被譏、遠字依被存載之、同題、眞觀房、詩の心を、

さらでだに跡うづむらん深山路よ

　　さこそは雪のふりつもるらめ

遠字、以之心得べし、又、戀、雑等にも、むすびたらん詞の字をぞ、かくのごとく可存歟、又、庭上の上の字、水邊の邊の字、野外の外の字、霞中の中の字、かくのごときの字は、皆捨つべきなり、但、野徑の徑の字、山路の路の字は、共に、道なるが故に、行歩の心、ふるくもよめり、

後京極殿、野徑月を、

　　ゆく末はそらもひとつの武藏野の
　　　草のはらよりいづる月かげ

同じ題を、知家卿、

　　武藏野はゆく末ちかくなりにけり
　　　こよひぞみつる山のはのつゝく

山路花を、故禪門、

　　嶺の雲なぎさのゆきにうづもれて
　　　花をぞたどるしがのやまごえ

徑字、路字、以之可心得歟、

一文字の數あらん題をぞ、上下にまくばるべし、一所にならべつゞくる事、見ぐるしき事也、又、題のやうにしたがひて、上を下にすることとは、くるしからず、一字題は、德を上句にいひて、題を下句におくべし、然而、又、便宜によるべし、二字も、又然也、しかはあれども、月見、花見と侍らん題にては、月見れど、花見ればと、初の五文字におきて、殘の四句にいふことなかるべし、

一殘花、岸藤などむすびたらん題をぞ、二字なりとも、よみわけたらん、尤神妙也、その名、二

字にかゝる款冬、早苗などは勿論也、されバ、清輔朝臣の、題を、よく〳〵心得べしといへり、返々肝心也と、常の物語にも申されき、されど、秀逸にて、集に入りたる歌も、歌合に負くる事あるは、題にかなはざるゆゑと聞え侍り、

一本歌をとる事、さま〴〵の躰あり、先、古歌の詞を、上下にしておきあらたむること、大躰也、本のまゝにおきつれバ、いかなる風情をめぐらしつれども、あたらしき歌に聞えず、本歌の詞を、おきあらたむる躰といへるは、故禪門、籬款冬を、

行春もよるはこえじととまるらん
くるゝまがきのやまぶきの花

本歌
夕ぐれのまがきは山と見えなゝん
夜はこえじとやどりとるべく

卯花似月、

卯の花のまがきは雲のいづことて
明けぬる月のかせやどすらん

本歌
夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを
雲のいづくにつきやどるらん

夕立、

いづみ川水まさるらしゆふだちに
けふみかのはら雨は降りきぬ

本歌
都出でゝけふみかのはらいづみ川
かはかせ寒みころもかせやま

虫を、

蘆垣のまちかきはどのきり〴〵す
思ひやなそといかでとはまし

本歌
人しれぬ思ひやなぞとあしがきの
　まぢかけれ共あふよしのなき

たゞいま、覺悟するにしたがひて、これを註す、他家には、此の躰をぞ、はゞからず、たゞ、古歌のまゝにのみおけり、されど、故禪門は、例の、あらはれ強盜、もしは、いけはぎ出來ぬと、利口申されき、其の躰といふは、貞觀房、鶯を、

春きぬといひし計りにうぐひすの
　なくねをはやく待出づるかな

本歌
今こんといひし計りにながつきの
　ありあけの月をまちいづる哉

郭公、
ほとゝぎす羽をや顏におほふらん
　鳴くよりほかの聲もきこえず

本歌
人しれずかはに袖をぞおほへども
　なくより外のなぐさめぞなき

庭雪、九條二品、
人とはぬ宿のしらゆきかきつめて
　外のきえなんあとやみるべき

本歌
みるひともなき山里のさくらばな
　外のちりなんのちぞさかまし

菖蒲を
枕とてあまたはねすなあやめぐさ
　かりにぞむすぶたゞ一夜のみ

本歌
小車のにしきのひもをときわげて
　あまたはねすなたゞ一夜のみ

千世の濱松（一）

これは、徳川十一代の將軍文恭院家齊公、御濱御殿へ御成のとき、其の御臺所の作り給ひしなり。文中に、君とあるは、即、將軍のことなり。御臺所は、近衛右大臣經熙公の養女、實は松平重豪の女なり。茂姫といふ。

頃は葉月はつか余り、濱の御庭へ參るべきおはせごとありて、いつかとまちえて、けふだにうれしきを、まいてたぐひなき、こまもろこしの、おりものにもまさるべき、はまべのけしき縫したる薄衣、帶ども、賜はれるかしこさ、いかゞいひつゞけ侍らむ。朝ばらけ、立こむる秋霧を分てまかり侍る誠にあさからぬ君の御惠は、計なき千尋の海よりもふかく、あらがねの地よりも高く、言つたふべきやうもあらで、たゞ

分けて行くこの武藏野の限りなき
　めぐみの露のかゝるうれしさ

となむくりかへしゐぶき奉る。君にも御船裝ひありて、出たゝせ賜ふ。空もいとようはれ渡りて、朝日かげさしのぼる程、道すがらの家居、あまた賤の家ごとに、なみ爲しゐたるなど、處々めづらかに、みやりつゝ行く程に、やう〳〵濱邊の亭に至りぬ、ところがら、木立ものぶり、いとおもしろく、見渡さる。中島の亭に、しばし休らひて、よもを見やりたるけしき、繪にも及ばぬさま、限りなし。休らふかたはらに、うるはしき箱の有けるを見れば、八雲たついづもの神のかず〳〵のこるかた〳〵あらぬ品々、入こめてなむ賜はれる。こや浦しまがゑたるはこにはあらで、嬉しき御

恩のかしこさをあふぎ奉る。それより、松の御腰掛に行きぬ。爰にも、扇さま〴〵、數多のたまもの、めゐわやなり。このかたはらの釣どのに、しばらく立とゞまるほど、今なむ、御先おふ聲聞ゆとつげきたる。そはとて、いそぎ海手の御茶屋に行。こゝにも、はた、いとうるはしき調度に、猶めづらかなる御菓子など、あまたたまはる。さむらふ人々、立こみつゝ、めであふぎ奉る。向の海を眺望すれば、千里の外まで咏やらるゝあまの舟、あみおろして、いろくず、あまたとりいれ侍るを、見るうちに、さをのうたを、うたひつれて、大川の御座となむいへる御舟の、いときらゝかなるにしきのとばり、白かねこがねの具、ひかりあひて、げにもかゝる御代のすがた、まことに天下をなびかし、人の國までゆかるべき御いつくしみを、あふぎ奉りぬ。ほどなく御舟の行につれて、我さきにとはしり行。すだれひきあげつゝ、若きも老たるも、かはわからすまに、さし出つゝ見奉る。まことに、

よつのうみ波ゆたかなり此の君の
御舟のあとは千代も盡きせじ

となむ、まづ賀し奉る。なほ行き〳〵て、御亭山に至りぬ。いと清らかなる水葵を、家づとに給はる。むかふ海原の水の色、波のよるさま、たゞ繪の如く、釣どのに至りて、いと珍らかに、釣たれて、ひめもす、あそびぬ。いづれともなき中にも、ひとりみたりつきそひて、釣する棹のさしひきを、

いをあまた釣りえしもたゞ海深き

君とおみとのめぐみなりけり

とうちわらふ。なほ行き〳〵て、庚申堂にぬかづきつゝ、こゝかしこ逍遥すれど、こゝなむ虫數多ありける處となむ。

百草のつゆわけ行けばかず〳〵に
ふりすてがたき鈴むしのこゑ

行程に新錢座、こゝはいなかめきたるけしきども、珍らかに、おもしろく、やう〳〵日も入かたちかくなり行くに、觀音堂に立よりて、還御の御舟、見奉らんとて、心にもあらずいそがれつゝみれど、ひえの山をはたちばかりにかさねあげたらんといへるも、つゞくべきほどの山の邊に、ゑどし待うけ奉る。ほどなう御舟出たゝせ給ふ。こたびは、さをのうたならで、いさましう聲あまたして、御船をこぎ出したるは、げにも、

繪がくともえはやおよびじ夕日影
かゞやくなみに出づる御船は

何くれと、殘るかたなき御あつかひども、かしこさいはむかたなくて、

あふぐぞよ濱の眞砂のかず〳〵に
つきせぬ君がふかきめぐみを

ひめもす、かへるさもわすれて、今一度海の面をのぞむ。

立ち歸る名殘をしと打ちむかふ
ながめは盡きぬ濱のゆふなみ

おほむ惠のかしこさ、心にみつる千々のひとつ、聞え奉るべきやうあらねど、心に思ふかたはしを、をかしき言の葉に、かきつらね侍るになむ、

千歳の基　（第四十六號の續）

一儉と吝とは、間違易きなり、儉は美德にして、吝は惡德なり、儉とは、物を小じめにするを云ふ、心も小じめにせざれバ、放になりゆき、身の調度も、小じめにならざれバ、奢に流る、書經にも、位は期せざれども驕ると云ふは 誰も、其の始に、位高くなりなど、高ぶらんと思ふ人も無なけれど、位高くなりて、此心小じめにならざれど、いつしか驕慢に成行き、富は期せざれも侈るとは、是も、始より、富みたらバ、侈らんとは思はねど、富めるに任せて、飲食衣服より、都て、身の上小じめにならざれバ、いつしか奢侈にありて、流れぬるを戒めし敎なり、

小じめと云ふは、物に節度を立て、足ることを知り、無用の費を省くをいふ、若、其の惠むべく、施すべきに臨んでは、一毫もをしむ心なく、施し惠むべきなり、其の施し惠むが爲に、かねてより、無用を省きて、有用を足らするなり、歌に、

おもひせバなにの暇かわら小田に
　かへすがへすもやすからぬ身を

皆人のそでもひへなるからでろも
　おる賤の女は夜さむなるらむ

是、農夫の工女の勞を痛める和歌なり、此の心ありなバ、我が身の衣食に耽る心あらまじ、朝夕の飲食衣服より、萬の調度に至るまで、質素にして、小じめに心懸けたまふべきなり、

一吝は、鄙吝と熟して、いやしく、しわき心ぞせにて、物惜みするをいふ。可賞可惠事ありても、吝嗇の心あれば、其の惠べき、賞すべき機にも後れて、惠み施すといへども、人の心を失ふに至る、吝は、せはしき心故、少し、我に餘計あれど、人にうはもる驕泰の心起る、婦の第一の惡德、嫉妬の心も、此の吝より出來るぞかし、妬ある心は、せはしく、きたなき志にて、己が心を以て、己が心をくるしめ侍るなり、妬の心よりは、顏色も、物言ふことも、さかしくなりて、猶々、夫主の愛想もつきて、終には、偕老の契も、枯々に成行くなり、夫は夫たらずとも、妻は妻たる道を守りなば、あしき事無く、などやかなるべきこと也、況や、王侯の上は、

媵妾の人も多ければ、猶更、少しなど、妬心ありては、宮中治まらざる也、前にもいふ大姒が、常に、賢女を得て、君に進めまゐらせ、子孫の榮を希ひ給へり、樛木の詩は、木々高き樹木の枝たれて、下に蔦葛のはひまつはるを見て、上の心下りて、下を慈しみて妬まざれど、下其の情にすがり、なづき從ひ、上下の心平かになりて、福祿の幸なるに與して、后妃の德を譽めたる辭なり、凡、妻を娶るは、子孫の繁榮をこそ、思ふべき事なるに、まして、王侯の家は、國の世嗣は、大事なれば、我のみ、子を生まんとに非ず、繼嗣の道、弘からん事を思ひ給ふべき事ぞかし、楚の樊姫は、君の爲に、己に勝る女あれど、進めて、内を助け、我が愛の衰ふるを憂

へずといへり、是に恥ぢて、表向の大臣は、又、已に勝れる大臣を勸めしかバ、内外、能く整ひ、國家治まりしとかや、能々心得給ふべきことぞかし、

一御身は、姉妹にも超えて、大國の君夫人と成給ふこと、いかなる果福ぞや、是、天より受得給ふには有るべけれども、又、父母の大恩ならずや、此の恩、何れの時にか報じ給ふべき、斯、姉妹に超え給ふ果福を得られしは、幸ながらも、又、恐れ給ふべき事ならずや、いかなる果福も、嗇まざれば盡きぬべし、嗇とは、其の果福を、果福とせず、恐れ愼みて、心の儘にせざるを、嗇といふ、易に、鬼神は、盈るを害して、謙に福し、人道は、盈るを惡みて、謙を好すとあり、滿ちて、覆らざるものあらんや、故に、盈といへども盈とせず、損して、又損し、嗇んて盡くさねバ、いつ迄も、此の果福、身に添ひて、行末永く、榮え給ふぞかし、古き歌に、

あすをまつけふこそはなの盛なれ
　咲き殘らねバちらずやはある

誰も見よみつれどやがてかく月の
　いざよひのそらや人の世の中

といへり、よつて、盈の戒め、常に、心に存し給ふ事ならずや、

一柯を伐、柯を伐　其則遠からずとかや、斧の柄を造らんとて、斧もてきれバ、其の持ちし柄こそは、直に、其の規則といへる事にて、事を、遠きにもとめず、近きに、其の則あるといへる

詩なり、御身の則も、遠く求め給ふに及ばず、近く、綫夫人、參夫人の上を見られよ、綫夫人の、中殿への事へられ方、百里を隔てし愚老への孝養、參夫人への慈愛、至らぬ方なきは、兼々聞及ばれし如く也、又、參夫人の、綫夫人の屋形への事へられ方、いと志ほらしく、行屆かれし事共にて、人々も感じあへるなり、百聞は、一見に志かずとかや、聞きしことより、見し事は、心に染まるも深きことなり、愚老が言を待たず、出府の上、此の二方を師とし學ばれ候へ、猶も、綫夫人の庭訓を、能く受用ゐられて、入輿の上、室家和合、琴瑟を鼓するが如く、千秋の榮を希ふ而已、

斯書、綴り綴りぬれど、濱の眞砂の數つもりて、筆の止度もあらざれども、思ひ出るまゝを書著し侍るのみなり、本より、他へ見せらるべきにあらねど、辭をも修めず、俄に、有合書どもより、あら〳〵書取り侍れど跡志どろなるも、老の水莖と見ゆるし給ふべし、今出府し給ふ上は、又逢ふべき期も計られず、思ひ出られし折々は、此の書を披き給ひて、萬分の一、益となりなば、老の幸、何の歡か、これに志かんやと、

文化十のとし衣更末の四日に筆を染め侍り、

門田のさなへ（つゞき）

なき名ぞと、人にはいひて、ありぬべし、心のと

はゞ、いかゞこたへん、

人には僞りて、それは、身にしらぬ事也、なき名を立てられし也など、いひまぎらはすとも、己が心は欺くべからず、かへりみて、はづかしからずや、心に快とせざれバ、心飢うると、賢き人ものたまひしなり、たゞ、萬のことは、わが心に向ひて、問ふにしくはなし、惡しき事をして、心よき人は、よにあるまじ、されども、又、其惡しき事が、ならはしになりぬれど、後は、心暗みはてゝ、よからぬ事が、中〳〵、をかしく覺ゆるやうの人もあるべし、人目よりも、わが心に耻づるといふことを忘るべからず、

大空を、てりゆく月の、淸けれど、雲かくせども、光けなくに、

齋院にまし〳〵ける御子を、御母、あやまちありとて、かへられんとし給ひけるを、その事止みにけれど、よみてまゐらせしとぞ、誠に、月の如く、心の淸くは、うき雲も、つひには晴れぬべし、たとひ、人、とかく、いひ騒ぐとも、己が潔きを頼むべきのみ、それを、心短く腹だちて、人を恨み、よをかこちぬれバ、彌、虚言を、誠にいひなさるゝ事もあり、また、或は、なき名をたてられし上は、よしやとて、われかち、其あだ名をとげて、實にするやうの人もあるべし、あぢきなき事ぞ、此歌の心を思ふべし、

かたちこそ、み山がくれの、朽木なれ、心は花に、なさばなりなん、

品かたちこそ、うまれつきたらめ、心は、賢きよ

り賢きに移さバ、移らざらんやと、つれ〴〵草にもたゝれたり、人々、形の醜きも、身の賤しきも、せんかたなけれバ、唯、心をますぐに、人の道を守るべし、心の花とて、いろめかしう、花やぎたるにはあらず、人の人たる心が、即、色香も深き花なるべし、

身は捨てつ、心をだにも、はふらさじ、つひにはいかゞ、なるとしるべく、

榮えし人の衰へ、あるは、なり出づべき由もなく、年もふり行くにつけて、此身はよしやと、思ひ捨てたる人のよめるにや、されども、身こそはあれ、心をだにも、淺ましくはふらさじ、はふらさで、終に、いかゞならんともしられずと、巳が心を諫めてよめるは、殊勝なるうた也、はふらすとは、放心にて、らちもなくなすをいふ、身のすたりゆくから、心も捨て、賤しく、よからぬわざをも仕出だす人は、悲しからずや、

いにしへの、野中の淸水、ぬるけれど、もとの心を、しる人ぞくむ、

野中の淸水は、播磨の印南野にありといへど、いづこの野にもいふべしや、古き井は埋れがちに、水も冷かならねど、もとの心をしる人は、猶くむとなり、もとの妻をバ、野中の淸水といふ説もあれど、それは、此歌よりいへるなるべし、男も女も、見そめつるえにしを、あはれとおもひて、色衰へ、或は馴れ行くにつけては、少し思はすなる心ざへ見えゆくとも、かたみに堪へ忍びて、共に、老を待つべし、目の前の、見めよきも、美しき

も、たゞ、ときのまに、うつろふ花の如く、たのむべからざるものを、

紅は、うつろふものぞ、つるばみの、馴れにしきぬに、あにしかめやも、

くれなゐの花やかなるは、人の眼につくものから、うつろひやすし、つるばみの打ちしめりたる馴れぎぬにはしかずと、よめるなり、つるばみは、四位の装束の色なり、男も女も、さしわたりて、色よきに、心の引かゝるは、若き時のならひなれど、よく〳〵、この歌の理をしるべし、

なにはびと、あし火たくやは、すゝたれど、おのが妻こそ、とこめづらしき、

上の句は、賤しき宿のふりぬるをいふ、三句は、すすけたれども、なれたる住ゐとても、相思ふ中は、いつも、めづらしく覺ゆるといへり、とこめづらは、常にめづらしきなり、とことはといふも同じ、

人の世のならひ、身のほど〳〵につけて、ひとしき程の家を撰びて、つまをむかへ、夫にたぐふ物から、年ふるまゝに、はじめにも似ず、かた〴〵の家の衰へゆくも、又、世に多き事なり、衰ふれど、心はこゝろとして事たらず、それによりて、ようせずは、夫婦、目をそばむるやうのこともあるべし、定めなき世のならひは、いかにともすべからず、唯、契りをむすぶの神のまに〳〵、とことはに、初の心を失ふべからず、およそ、男女の中にも限らず、親類の間、友だちの交にも、或は、勢によりて交り、富によりて結びぬるものは、其勢、其富の時うつれど、必、疎くなるものなり、

心あるきは、はじめより、其志を見るべし、」深き夜の、窓うつ雨に、音せぬは、うきよをのきの、志のぶ也けり、
堪忍をよめる歌也、夜ふけ、人定まりて後、窓うつ雨のはげしきは、殊に、耳にたつべきを、軒の忍の、志なやかにうけたれど、音せぬなり、もし、板屋のあらたなるが如きは、あらそひて、あらましかるべし、其如くなる事なかれ、又、うきよをのきて通ずといへるか如く、とかく愼みて、相手にならじとかまふべし、昔、實方中將といひける人、何かいきまきて、行成卿の冠をうち落されしを、少しも騒がす、其冠をとりて、靜にかふむり、けしかる御振舞やとばかりいはれしを、御門、御覽じつけて、行成卿をほめ給ひ、實方朝臣をぞ、歌枕見てまゐれと、東の方へやり給ひしと、物に見えたり、堪忍の敎は、もろこしの文、天竺の敎にも多けれど、こゝには、煩はしくあげず、要をいへば、百戰百勝、不如一忍と見え、忍之爲德、持戒苦行所不及、とあるなど、此歌に合せて思ふべし、

（つゞく）

越後上布

あゝ　まゝ

麻の皮を糸として布に織なすことは、最も古き事にて、既に神代よりあり、麻の類に、からむしといふものあり、亦織物とすべし、今我國のみならず海外にても、麻、からむしの類を以て織物を製すること限無く多し、中にも呂宋のマニラの麻は殊

に世界に有名なるものなれど、織物としては越後上布のうるはしく、巧なるに及ぶもの無し、

今の木綿といふものは、三百年ほど以前に外國より傳はりしものにて、そのまへには、今木綿を用ゐるところに、多くは麻を用ゐしものなり、尤絹物はありたれども、中以上の身分の人の用ゐしにて、下が下までには及ばざりしなり、されどおしなめては、麻の類を用ゐることにて、越後にても之を織りしことはいふまでも無し、併しそれは粗末なるものにて、今の上布にはくらぶべきものにはあらざりしなるべし、

今を去ること二百年ばかりの昔、播磨國、赤穗の人にて明石二郎といひしものあり、如何なる故ありしか、けさ、まつといふ二人の娘をつれて、此所彼所流浪する中に、はからず越後に來り、小千谷町の近在なる山谷村の名主彦治右衛門といふものの家に厄介になりてありき、彦治右衛門はもとより慈悲深きものなりしかば、明石親子のたよりなきを憐みて、久しく養ひおきけり、二郎も原は武士なれば、只、人の世話になりをるも心ならねど、何か一事を始めて、其地に利益を遺し、名主の恩にも報いばやと、日頃心を砕きて考へけり、或時、ふとおもふやう、この山谷村は名にも呼ぶが如く山の中の谷にて、樹木いと多けれど、田畠は少なし、着物にすべきものなども多くは他所より、炭薪、材木など賣りし金に易へて、買ひ入るるなり、されば寒き國にてありながら着物には不自由なり、この多くある木の皮を糸として、織物

を作りなせ、其益多かるべしと、
柳の木の、枝細く長く垂れたる、これやよからんと思ひ、まづ其皮を剝ぎ取りて、とある谷川の水に浸し、又釜にて蒸しなどして、さらしあげ、娘に云ひ付けて績がせたれど、思ひの如くにあらず、とても織物になるべくも無し、さてはあれや善からん、是れや善きと、山又山にわけ入りて、目に留るものをとりきて製し試みたれど、いづれも用をなさゞりき、

されどなほ心を勵まし、人の笑をもかへりみず、あさりにもとめありくこと、日頃ふるほどに、始めて見出だしたるものあり、是なんからむし草にはありける、

按ずるにからむし一名をまをといふ、麻の類なり、

春、宿根より芽を出し、高さ四五尺ほどに及ぶ、葉は楮に似て、たがひちがひにいづ、切れめなくして裏白し、夏、葉の間に長き穗を立てゝこまかなる花咲く、其色靑し、

明石二郎、からむしを得て、其莖を水にひたしてのち、席を覆ひてむし、皮をはぎとり、又水にて洒しゝに、已前の柳の皮などには似もやらず、いと美はしき靑苧になりぬ、親子三人のよろこび喩へんかたなく、名主も其丹誠の空からざりしをほめつ、

さて其靑苧を娘に績がせて、糸になし、撚をかけて、灰汁にて煮ること、一日一夜、之を機に上げて、姉妹迭みがはりに織りて、都合よく一反の布に織成したり、

其織物縱横共にちゞみて小皺ありしかバ、これを
ちゞみと後に名づく、
始め柳にて試みしより、このからむしのちゞみを一反仕あぐるまでに、四ケ年をすぐしき、其長き間三人の心をいため、骨を折りしこと、思ひやるべきなり、何にても新しく業を始むる容易からぬことにこそ

かくめづらしき織物の、しかもうるはしきを造り出したることとなれバ、年頃、わらひしものも口をつぐみ、昨日まであざけりしものも、今ははめたてしほどに、其事、近在にかくれなく、誰も彼も、これを見、これを求めんとするほどなれバ、暫くの間に親子三人のみにては、手のまはらぬまでに、いそがはしくなりぬ、又其頃小千谷町に中町清兵衛といふ金持の商人あり、二郎、人の世話によりて、其者に賣捌きのこと何くれと頼みしかバ、清兵衛も豫ねて其事を聞き及べる中なれバ、心よく受け込みて、なほ元手數多貸しあたへ、深切に心をそへて、其業を助けしかバ、彌々盛りになりぬ、かくて親子三人の人數多を指圖して、次々に織り出させ、又織方、色、模様、など工風に工風をかさね、うるはしく巧みに織なし、清兵衛は、江戸、京、大坂はいふまでも無く、此所彼所へ送りて、賣捌を試みしに、思ひの外に評判よく、年々其業盛大となり今の如く誰しらぬもの無きまでに至りぬ、かくて次郎は六十八歳にて身まかり小千谷町眞宗極樂寺に葬れり、又同町に明石大明神といふあり、今より五十年ばかり以前に、二郎の功德を

おもひて、上布の織屋問屋など、其恩にむくいんとて祀りしなりとぞ、上布の事にて、なは知れることあれど、そは又次々に、

女畫師

乙羽庵主人

其一

花はたゞ輪大きくして、目眩しき程嬋妍ならむよりは、早咲きの梅のなは北風を恐がる風情して、瓣も手頭に、色も雪に擬ふ美人の、儀式の席に好かぬ酒強られて、頬の邊の淡然と薄紅くなり、香のみ一入高きをこそ望ましけれ。人も榮華に時めきて、食前方丈美童麗姫に冊かれ、浮いた／＼と酒に呑まれ、戀に打たれて、金冠に命様參るなどの銘彫つけたる二位三位の大臣よりも、よしや貧しくとも、畫師は天爵なりとの金言を守り、丹青の技に身を托し、秋天落木の中に住みても、春は筆頭にありと濟して、世を渡る人の境界こそ、いと穩かなるべけれ。

加州金澤は百萬石の御城下とて、民も富饒にして度胸廣く、よろづ物事にこせつか

ぬ中に、小池芳子といふ女畫師あり、繪の道は父より傳へられし技とて、畫風卑しからず、殊更花鳥を描くに妙を得、一枝の筆に千種萬種の花を着けて、鳥を宿し、蝶を留まらせ、そを椽側に出し置けば、庭鳥飛んで畫中に遊び、落花躍りて畫花と、いづれか眞なるを疑はしむ。斯かれば土地の老幼は畫の神と綽名して、池旭といふ號をば呼ぶ者無し。

固より池旭は容顔も美麗にして、擧動もいと優しかりければ、畫に托せて、弟子にならむ、門下に仕へんなど、云ひ寄る男子のあるを多くは斷り、弟子てふものは一人も持たず、果は男子の蒼蠅きを嫌ひて、終日畫室を出ざりしが、斯くても珠玉は珠玉なり、隱れても洩る光明を、浮かれ男共は後光と唱へて、なほ囂しく云ひ寄りぬ。

斯道に精しきにつけ、他人の噂を懶がりて、池旭は遂に故郷を去りぬ。氣輕の女性の癖とて、住む家を塵の世を捨てし如くに賣拂ひ、穿き馴れぬ草鞋に足を痛めて、瀬多に暫らく逗留し、唐崎の松の露に袖を濕しつゝ、京の三條に入りけり。

京の金閣寺を見て來たかと。小唄にまでも唄ふ京都は、名所古跡の塵の山、とり別

け嵐山の秋の色は　大井川に錦を晒して、筏師がさす水馴棹に、欸乃の節面白く、渡月橋を渡り、三軒家の床几に腰うちかけて、大原女が柴賣に出る姿を見れバ、太古の昔時も忍ばれて、土佐住吉の畫風を賞め、松の音や峯の嵐を眺めては、應擧が筆を想ひやり、われを斯うして彼ァしてと、圖取に餘念無き池旭が顔をつく〴〵見て、訝かしげに頭を傾け給ふ殿上人あり。

薄桃色綾織の狩衣に、純子の袴を着けさせ給ひし品好き殿なり。太刀持ちの童に、白丁一人を召供し、橋を渡りて三軒家の方に來給ふに、年若き女の頻りに寫生に思慮を凝らし居るに弗と心つかせられ、其身も斯道を好ませらるゝにや、傍近く立寄りて、竊にその畫を立覗き給ふに、見かけに寄らぬ能筆にて、位置の宜き、運筆の妙、隈取の趣あるなど、一つ〳〵驚かるゝ技なれバ、如何なる者の娘にて、斯くは丹青の技に秀でけむ、その名を問うて我も揮毫を賴まバやと思召ながらも、身分に恥てはした無き事を宣はず、其身は直と床几を離れて、彼方の椽に腰かけ給へバ、庭前にある一株の楓の、紅の如く色つきて、夕陽を照り反す樣の美くしさ、宛から紅張の晴傘の下よ、大宮人の憩ふ繪の如し。





菊麿〳〵と呼ませ給へば、童は慇懃に地に額づき。御用で御座りまするかと云ふ。公卿は持てる扇に顔を掩ひ給ひつ。菊麿其方は彼方に行きて、女畫師の住所を尋ねて來よ、そして主人儀御身に畫の揮毫を頼みたき由申居らるゝが、只今は何處に居らるゝや、確と聞いて參れとの御意なりと傳へよ。童は大人しく畏りぬ。

童は直にその傍に至りて。畫師どの〳〵と呼べば、池旭は訝りながら此方を向くに、繪にあるやうな童の居れば慌てゝ一禮し。何の御用かと問ふ。童は彼方を指して、あれ〳〵あれに居給ふは、我等の主人千種有功卿なり、御身の技に感服し給ひて、畫を御所望遊ばしますぞ、いざ此方に參られて、御用を承り奉られよと云ふに、池旭恐る〳〵椽側まで進み出で。妾は池旭と申まする旅畫師、お召によりて參りました、御用何なりと仰せ下されませと云へば、有功卿は微笑ませ給ひ。おう〳〵旅畫師、殊勝なる事を申す、我は其方に嵐山の圖を頼みたい、期日はこの月の末までにてよし、池旭とやら確と頼んだぞと仰せあるや、菊麿まゐれと急がし立て、暮れぬ間にと家路に着かせ給ひけり。

池旭も日暮れては便り惡しと、急ぎ三條の旅宿に歸り、今日しも卿に頼まれたる嵐

山の圖を、絹本の大幅に書き初めけり。

池旭の座敷は奥の離れなるに、男嫌ひなればとて、居間の周圍に注連縄を懸けめぐらし、百の不淨を一切入れじと、その意氣込凄ましく、硯を洗ひ、墨新らしく磨りて、一心不亂に思想を圖中に潜めければ、四日五日と過ぎて、山を描き、水を畫くに、天晴美事なるが出來上りぬ。

文林

故郷擣衣　　山階宮

このごろのさやけき月を詠めつゝ
故さとびとやころもうつらん

近衛　忠煕

からごろもうつ音しげし露しもの
故さとさむくおきふけぬらん

徳大寺實則

住む人のすくなくなりしふる郷は
きぬたの音もまどほなるかな

毛利　元徳

住みすてしわが故郷をきてみれば
うつかきぬたのおとぞ殘れる

東久世通禧

すゝきはらまばらにみゆる故郷の
賤がふせ屋にころもうつなり

佐々木高行

浦風のみに染む志賀のふるさとに
ころもうつなり秋のゆふぐれ

前田　利嗣

われはてゝ野となるさともから衣
擣つ聲たえずきこえけるかな

長岡　護美

荒れはてし草のふるさと誰すみて
むかしの月にころもうつらん

菊花芳　　黒田　清綱

ちよの香は籬よりこそあまりけれ

菊のさかりはなかばなれども

故郷擣衣　　高崎　正風

野となりて鶉なくべきふるさとに
なほころもうつ音のきこゆる

前田　利鬯

月ばかりすむと思ひしふるさとの
むぐらの庭にころもうつなり

月前露　　諏訪　忠元

おく露を玉とみがきてあきのよの
月のひかりはさやけかりけり

故郷擣衣　　小出　粲

むかしより家はすくなきふる郷に
きぬたの音ぞかずまさりぬる

坂　正臣

唐ごろもうつ音きけバふるさとに
すみのこりたる人もありけり
植松　有經

ひとつ屋もありとはみしぬ故郷の
すゝきが原にころもうつなり
谷　勤

おほかたは家ゐもあれしふる郷に
誰すみなれてころもうつらん
内藤　存守

すむ家もまばらになりし故さとよ
擣つやきぬたのおとの淋しき

水邊月　岡部　譲

釣殿にかぜまちてみしつきかげの
みにしむぞかり秋ふけにけり

秋祝　上地　信光

荒垣のよそにみるだにゆたけきは
としあるあきの田面なりけり

秋のころ物へゆく道にて　三浦　千春

野菊さくちふのつゆ原ふみわけて
あさゆく道になくきりぐす

別後　光岡　正彰

別かれてもなぐさむべきは大空の
かゞみにまがふ月のひかりか

前田利家の室　佐々　豊水

こもまくら高旗たてゝおりいでし
心のにしきあやにうるはし

海邊月　草野　隆道

砧うつおとこそたゆれ小夜ふけて

つきやみるらん難波をとめも
勝家　貞良

鶉

ゆきくれて月まちをれどふか草の
里のわたりにうづらなくなり
鍋島　榮子

故郷擣衣

今もなほすむ人あれやふるさとの
のなかの岡にころもうつなり
前田　朗子

野となりてふりにし里と思ひしを
たれ又すみてころもうつらん
柳原　愛子

ふる里は家ゐもまれになりぬらん
擣つやきぬたの音のすくなき
小池　道子

すむ人もあらじとおもひし故郷の
浅茅がはらにころもうつなり
松平　健子

ふるさとは鶉なく野となりにしを
誰またすみてころもうつらん
鶴　久子

あれたれど家は殘れるふるさとに
誰うつりきてころもうつらん
中島　歌子

また更にすむ人あれや野となりし
里にことしはころもうつなり
三輪田眞佐子

海邊千鳥

あかし潟せとふく風もさよふけて
隈なきつきにちどりなくなり

里擣衣　諏訪晴子

たがさとかよるの衣をつきかけに
秋もふけぬとうちわかすらん

彈琴　安東菊子

玉だれの內なつかしくきこゆなり
たがつま琴のしらべなるらん

手跡のあしきをなげきて　小川昌子

かき流すわがみづくきの跡をみて
消えいりぬべくおもほゆる哉

月十五首の中　師岡須賀子

螢にもゆきにもうときまどの內を
くまなくてらす秋の夜のつき

大方のまち見るほどはくもりつゝ
しづけき夜半にすめる月かげ

まち〳〵し望はくもりぬ今宵こそ
飽くまでも見めいざよひの月

名所秋風　海上壽子

睦ましき其名にもにずいかなれど
いもせの山にあきかぜのふく

秋ぎりふかき夕ぐれかりのあまたかへるを見て　河野ふみ子

うちむれてまぢかくわたる雁金の
行方もわかぬあきのゆふぎり

みちのつとのはしがき

稅所敦子

昔より、道の記などいへるは、大かた、物まうで、あるは、ゆあみなど、心のどかなる旅人のすさび

雑報

なめるを、こは、三月の末より、四月の始をかけて、上は、名古屋の大演習にのぞませ給ひ、それより、后の宮とともに、西京にみゆきせさせ給ひて、やがて、神戸より、軍艦に召され、くれのみなと、佐世保港などへ、わたらせ給へるほど、宮は、仰によりて、うねび山のみさゝぎにまうでさせたまひ、御道のつてに、ならの京より、よしののみやのふるきあとを御覧じ、二十五日には、まひこの濱におはしまして、鐵道開通式をみそなはすなど、おほやけごとゝも、おほかる御旅路に、したがひたてまつりて、ことに、おほみやつかへ、

いとまなきほどながら、日ごとに、大まへわたりより、わたくしざまのこまかきことゞもまで、筆にまかせて、とりもつくろはず、しるし置きたまへるが、いたり深きまごゝろみえて、なかなかに、みやびをもとめたらんよりも、きはことに、めでたうおぼえつゝ、むなしく、御あとにとゞまりて、ゆかしうのみ、思ひやりしところどころのありさまも、このまきをひもとくまゝに、まのあたり、みるこゝちせらるゝは、世にふたつなき、ことのはのみちのつとゝも、いはまほしうこそ。

●婦女鑑　福岡縣早良郡樋井川村大字田島の平井やすといふは、夫清の身まかりてより、よく貞節を守り、舅姑に事ふること、いとまめ〳〵しく、ことに、舅、病躰なれバ、晝夜、懇に看護し、いさゝかも怠る色なきのみならず、兒女の教育に、心を用うることの深きなど、十數年の間、露ばかりも渝はることなくして、彌益に、その徳行顯れけれど、こたび、賞勳局より、金十圓を賜はりて、之を賞めたゝへられたり。まことに、今の時に得がたき婦女鑑にこそ。

●女子教育に關する私見（つゞき）

我帝國にては男子と女子と等しく同一の度に教育することは國情の許さゞる所に似たりと雖男女の教育各相當に普通上進することの必要なるは言を要せざるべし而して現今我邦女子の教育は男子の教育と調和を缺くこと甚しきものと認むるなり女子の教育は大に之を奬勵して相當に普及上進するにあらざれど男女教育の調和は望むべからざるべし申迄もなきことながら女子の教育を奬勵するは獨女子のために計るにあらず試に男子の幸福と云ふ一點のみを以て論ずるも女子の教育は相當に進めざるべからず女子の教育相當に進むにあらざれバ幸福なる家を成すに於て主なる元素を缺くことあるにあらずや又家庭教育といふ一事を以ても各家庭には相當の教育ある女子を要すること明ならずや女子を要する所は獨家庭のみにあらず社會が教育ある女子の務を要することも亦決して家庭に讓らざるべし約言すれど年少なる女子は未來の

國民の母なりとの點よりして女子教育の忽にすべからざることは明瞭なり曩に余が尊敬する細川潤次郎君の女子高等師範學校長の職につかれたる時詠せられたる歌あり

女郎花咲きにほはなん男花のみ
　ほに出る野邊は淋しからまし

此歌の旨趣は一家にも一村にも一國にも適用すべきものなりと信ずるなり切に望む男花と女郎花ともに咲き匂はんことを

然るに男女小學就學の比は近來文部大臣の訓令にも見ゆる如く男に比し女は甚僅少にして男兒二百五十萬人余に對する女兒僅に百十萬人余なり又男子の修學すべき尋常中學校は其數現今五十ありと云ふに之に對すべき高等女學校は其公立に係るもの僅に九私立に係るもの四十四ありて多くは三府其他に偏在す而して高等中學校以上に當るべき女學校は未其設けなしと云はざるべからず(未完)

●月次花鳥色紙形　關白近衛家熙公の眞蹟、古歌二十四首の色紙を、もとも精密に摹刻して、京橋區南傳馬町一丁目吉川書店より發賣せるものなり。公は、世に名高き多藝多能家におはして、殊に、書を能くせられしは、世のよく知れるところなれど、この色紙形書體の、いかに高雅なるかは、記者の贅言を要せざるべし。且、こを手本として學びなバ、和歌色紙の認めふりをも、幷せて學び得らるべき最有益なるものなり。

●雨月物語　こは、上田秋成ぬしの遺著にして、こたび、京橋區釆女町富士貸本部より、飜刻せるものなり。一讀の價は、たしかにあるべし。

餘芳

みちのつと

小池道子

三月廿八日、曉より雨降る。午前七時、大みけしきうるはしう、出立たせ給へり。劔璽は、高倉典侍、柳原權典侍、さゝけ奉り給ひて、富小路侍從、東園侍從に渡し奉り給ふ。皇后宮は、新橋まで送らせ給はむと、出立たせ給へり。雨、いよ〳〵ふる。長き御車の内、いかに座しますらむと、只、空のみ打守らる。宮、歸りおはしまして、御行裝殿に立たせ給へる御物語ども、爲させ給ふ。五時過ぐる程、名古屋に着かせ給へる電報あり。今夜は、宮の御別れの御うたげに、御息所たち、大臣、顧問官などの北方、召させ給へり。

廿九日、今日も、雨、いみじう降る。半田に渡りまします可き日なれど、殊に、安からず打ちながめさせ給へり。人々も、何事も忘れて、例の空のみ打守る。今夜も、御息所、北方たち、參り給ふ。われも、召されぬ。よべも、今宵も、室内音樂あり。奥に入らせ給ひて後、竹豐にて、御舟に召させ給へる電報あり。いかなる所にて、お

かさせ給ふらむと、いとかしこし。

卅日、てけよし。演習も、殊に、勇ましうましますらむなど、御上の事にのみ、過ぐさせ給ふ。行啓近く成るまゝに、參り給へる人多し。御苑の花も、見捨てゝやまむは、口惜しと思へど、吹上まで出でむ暇無ければ、園權典侍、姉小路掌侍など、紅葉山のわたりより、堀きはの木陰、尋ねありく。且見ながらもなど思へど、歌もゑよまず。

卅一日、雨は、いみじう降る。あやにくなる空かなと、例のながめさせ給ふ。一時過ぐる頃より、柳原權典侍、生源寺權命婦と共に、うち連れて、東宮に參りぬ。御前近う侍りて、宮の御ことつてども、啓す。御學びの暇なるべし。御遊びがたきの君たち、召し集めて、碁うたせ給へり。かゝる御遊びの折の言草のはしはしにも、心を用ひて、かしづき仕へらるゝ人々の用意、有難くおぼゆ。をとゞしの夏、惱みおはしましける時、上も、宮も、おぼつかながらせ給ひて、樹下掌侍、姉小路掌侍と吾と、日毎に、交る替る參りて、見奉りし頃は、いわけなくおはしましつるを、いたく、およすけさせ給ひて、折々は、戯れさせ給ひながら、をさめやかに、物などの

たまはす。内にて、見たいまつる折は、かうしもおはしまさずと、かしこけれど、打守り奉らるゝを、老いたりとや見そなはすらむ。暮れぬ先に、暇給はりて歸りぬ。今日は、名古屋に歸りましましたる由、電報ありと承る、

四月一日、天氣よし。十一時ばかりより、常宮、參り給へり。うるはしう、肥えさせ給ひて、御まみの匂ひ、なつかしう、愛きやうつき給へり。宮の御衣を引かせ給ひて、譽めさせ給ひ、人々にも見奉れど、のたまはする御有樣、めでたう見奉らるゝに、宮も、打笑みて見奉らせ給ふ。今日も、參り給へる人多し。三時頃より、皇太后宮に、渡り給ふ。のどやかに、御物語とも、爲させ給ひて、大御酒まゐらせ給ひ、人人にも給ひぬ。暫くの御旅なれど、のこらせ給へる御心、いかにと推し量り奉らる。

教の庭

十月廿日兼題　名所千鳥

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　長野縣長野町　吉田芳子

住吉のうらのまつかせさよふけて
かたぶくつきに千鳥なくなり

地　府下神田區駿河臺西紅梅町　高橋なみ子

さゞなみや志賀のうらわの友千鳥
なれもむかしを忍びてや鳴く

人

水鳥のおきのしほかぜはやからし
のさかの浦にちどりしばなく　熊本縣菊池郡城北村　佐々有鄰子

夕ざれば聲もたかしのはまちどり
おとなき波になきわたるなり　石井德子

夕ざれば友よぶこゑもさえ〴〵て
千鳥なくなりあまのはしだて　石井かめ子

すわだなるま丶の入江の夕まぐれ
浦ふくかぜにちどりなくなり　伊藤海子

須磨明石こゑをかはして友千どり
うきねの人のゆめさますらん　小橋幸子

飛鳥川かはかぜさむきふゆの夜は
ふちにも瀬にも千鳥なくなり　千々波橋子

さは川にかよふ千鳥のこゑすなり
妻やこひしきともやかなしき　片岡光子

さよふけて月影きよしあかしがた
千鳥のこゑもすみわたりつ丶　上野兼子

月きよきあかしの浦のはまちどり
しほのみちひにたち騷ぐなり　高井米子

須磨の浦やかたぶく月になく千鳥
しほみちぬらし遠ざかりゆく　土生清子

さえわたる月の明石のうらなみに
こゑうちかはし千鳥なくなり　河野文子

よるなみにつきもあかしの浦千鳥
聲さやけくもなきわたるなり　青木春子

夜もすがらあはての浦のいそ千鳥
つまとひわびてなき渡るらむ　永井さい子

月かげのすみだ川原によもすがら
とゞまぞはして千鳥なくなり　久保田律子

風さゆるかものかはらになく千鳥
こゑも弱りぬ夜や更けぬらし　[illegible]山錦子

風さえて月もあかしのうらちどり
うらさびしくもなき渡るかな　內田慶子

さほかはのかはかみとほく夕千鳥
なきてぞわたる聲きこゆなり　內田雪子

すみよしの濱邊にたゞむら千鳥
御代壽ほぎて八千代とぞなく　野尻鶴子

しほ風につきのかげさへ須磨の浦
波おとたかくちどりなくなり　花山やすね

すまの浦や月の夜ころはたつ波の
音もとだねてちどりなくなり　花山みさを

夕ざれはしほ風さむくあられふり
すまの浦わにちどりなくなり　花山きのと

關守よいざこととはん須磨の浦の
ちどりなく夜はいかに明すと　上田國子

長き夜をひとりあかしのうら千鳥
うらなき友をこひつ丶やなく　宮田昌子

住吉のきしのまつかせおとさえて　栃木いね子

ゆふなみさむく千鳥なくなり
すまのうらや岩こす波にたつ千鳥　羽田三緒子
汐ひのかたになきてゆくらん
淸見がた志はみちくれば波たかく　羽田たか子
いそべにむれてなく千鳥かな
浪花江の浦かぜさむきさむしろに　島田悦子
ねざめさびしく千鳥なくなり
あかしがた吹く風寒くねざむれば　勝家かをる
有明のつきにちどりなくなり
やま志ろのかもの川原のむら千鳥　太由兼子
君がみよをば八千代とぞなく
よもすがら明石の浦のいざり火に　三田さめ子
數さへ見えてちどりなくなり
住の江の浦のひかたやみちぬらん　花岡うめ子
なぎさにつどふむら千鳥かな
夕汐のみつのうらわのともちどり　波岡志ま子
なみを隔てによびぞかはせる
ともし火の明石の浦のはまちどり　松原きやう子
鳴くなるこゑに數ぞ志らるゝ
月かげになくやあかしの浦ちどり　白井くに子
ゆたかなる夜の驗なるらん
橋立のまつふくかぜにきほひつゝ　中川志ん子
よする浪間にちどりなくなり
久方のつきのひかりをきよみがた　佐藤とみ子
すめる千鳥のこゑもさやけし

すみのえに寄來る浪の瀨をはやみ　工藤まさ子
寄るかたもなく千鳥たつなり
水淸みつきもさえゆくすみだがは　藤田くら子
かずさへ志るく千鳥なくなり
照るつきのかげも隅田のかは波に　荒瀨ゆう子
うきつゝ夜たゞ千鳥なくなり
なにはがた波のよる／＼なく聲は　白石あい子
友よびかはすちどりなりけり
打ちよする浪の舞子のはまちどり　伊地知德子
なくなる聲はふえかとぞ思ふ
淀川のなぎさにすめるむらちどり　三田郁鶴子
なみのよる／＼なき渡るなり
須磨の浦月のでしほのむらちどり　平澤とし子
なくねさやけき冬のよはかな
難波江のあしのかれはにてる月を　加藤とせ子
おのが友とやちどりなくらん
小夜千鳥ふけゆくまゝに聲志げく　馬場とく子
やがてあかしの浦になくなり
難波潟あしまによたゝなくこゑは　平井ふゆゑ
なみのうへなる千鳥なりけり
むろの津へ夜な／＼かよふ島千鳥　行田ゆき子
海士のとまやの夢に入るらむ
あかしがた通ふ千鳥のなくこゑは　川村ちま子
瀨よりほかにきくひとぞなき
昨日今日あすか川原になくちどり　春部まさ子

ふちせさだめぬ世をや恨める　南大路芳枝

橘立や輿謝のうなゐらわけそめて
いそやま千鳥なきわたるなり　南大路正子

あすか川ふちせさだめぬ川みづに
友うちむれてちどりなくなり　碓井信子

住吉のまつふくかせもおとたえて
かたぶく月にちどりなくなり　碓井たけ子

君がよをやちよとぞなくはま千鳥
すまの海べやゝしづけかるらむ　碓井和歌子

さゝなみのしがの浦風さむからし
唐さきのわたり千鳥なくなり　本田せき子

鳴海がた岩にくだけてちるなみに
をちかへりなくとも千鳥かな　本田きよ子

をちかへりすまのふちせの夕浪に
昔おぼえてなくちどりかな　植木鋼子

よせかへる波のまに／＼住の江に
千代よびかはすとも千鳥かな　中島里枝

なには潟よせくる波にむれたちて
芦間をいそぎちどりなくなり　高鹿まさ子

きのふまで涼しと思ひし飛鳥がは
吹く風さえてちどりなくなり　折田親子

汐風のさむくふくよはあはぢしま
かよふ千鳥のこゑみだれつゝ　山本澄江

須磨の浦にやどりてきけむ淡路島
かよふ千鳥のこゑのみぞする　江馬信子

夕暮にあかしのうらをゆきかよひ
ともよびかはすむら千鳥かな　宗紺子

高砂のまつかせさむく身にしみて
すまの浦わにちどりなくなり　平山房子

あけかたになるとの千鳥風さむみ
立ち來る波にむれてなくなり　倉掛元子

小夜ふけて千鳥の聲ぞきこゆなる
ねざめさびしき床のうらわに　渡邊金子

立つ浪のたかしの濱のまつかせに
つきかげさむく千鳥なくなり　小島春子

沖つなみたかしの濱のさよちどり
みち來るしほに聲ぞちかづく　森川とし子

つしま潟ことせの千鳥ひくしほに
友よぶこゑぞとほくなりゆく　田島とめ子

もしほやく須磨の浦わの夕けぶり
行くへもしらす千鳥なくなり　三浦とき子

鹽の山しほかせさえてゆふつきの
さしでのいそに千鳥なくなり　三浦たま子

舟はてんとまりしらせてはりま潟
むろのわたりに千鳥なくなり　田城きわ子

しつかなる明石の浦のゆふなみに
群れたつちどり聲のさやけさ　松井たまみ

難波潟しほみちくらしおきとほく
きゝし千鳥のこゑぞちかづく　大亦隆子

名に聞しわかの浦わに來て見れむ

たまつしまねに千鳥なくなり

あかしがた岩うつなみの音たえて
沖邊はるかにちどりなくなり　岡本　庫子

淡路島かよふちどりのなくこゑは
むかしながらのすまの浦かな　宇多川楊子

衣手にやどれるつきのかげさえて
まひこのはまに千鳥なくなり　藤澤もと子

隅田川ゆふぎりはれてさしのぼる
つきにしぞなくむら千鳥かな　山田　先子

夜をさむみねざめてきけばなみ枕
あかしの浦にちどりなくなり　高橋　政子

須磨の浦よする波間のつきかげに
をちかへりつゝ千鳥なくなり　横瀬たか子

さよふけて隅田川原になくちどり
なれもねられぬ音をや立らん　伊達よし子

武士のやそうぢがはのかはかぜに
ともよぶ千鳥なきわたるなり　山田しづ子

夜もすがらふけひの浦になく千鳥
たちゐさだめぬ聲のきこゆる　坂口たみ子

川風のうらわによするゆふなみの
たちゐひまなく千鳥なくなり　宮坂しん子

妻こひてひとりあかしの浦なみに
こゑうちそへて千鳥なくなり　安藤よね子

おきつ風ふけひの浦のさよちどり
浪のよる〳〵なきあかすらん　小林てい子

須磨のうらまつの梢につきおちて
あかつきさむく千鳥なくなり　宇野さく子

置くつゆにあとやとゞめん住吉の
おまへの濱にちどりなくなり　千日　文子

住吉のきしのまつかぜおとさえて
なみのまに〳〵千鳥なくなり　永易　瀧野

白波のよするあかしのあらいそに
うらかぜさえて千鳥なくなり　永易　幾野

夕ざればしは風さえてよもすがら
かしまが崎にちどりなくなり　不　詳

風さゆる佐保の河原のゆふまぐれ
かたしぐれして千鳥なくなり　土屋てい子

すまの浦かよふ千鳥のなくこゑに
今はねざむるせきもりもなし　中村外千代

さよ千鳥なく聲さむくきこゆなり
天のはしだてしもやおくらむ　神田あい子

この朝けよどのわたりに舟よべど
こたへがほにも千鳥なくなり　山口きよ子

高砂のまつのあらしのおとさえて
なみにみだるゝむら千鳥かな　橋本數江子

すまはなあかしは疊る寒さよの
波にしぐるゝむらちどりかな　橋本めぐみ

月かげもすみだ川原のよもすがら
こゝろしづかになく千鳥かな　柳　靖子

つきかげもいつしかふけて明石潟　落合みさを

　波路はるかにちどりなくなり
波まくらことゞひかねて須磨浦に　川口とは子
　まつ風さむくなくちどりかな
月暗くきりさへふかしわかしがた　田村長子
　なにをえるべに千鳥なくらん
きりふかき佐保の川原の川よどに　尾崎なほ子
　友よぶちどりこゑたえずなく

十月廿日兼題　和歌の論

天　京都府愛宕郡上賀茂村　山本澄江

虎とのみ思ひて放つ矢さきには石さへとほし丶例あれど誠の道こそ尊けれまして人たるものに向ひて眞心もてゆかば誰かは感動せざるべき然れば子として親を恨み妻として夫に棄らるゝもの皆誠の至らぬなるべしそも〳〵和歌は誠の心を種とするものなればよく人の怒を和らげ人の憂をなぐさむるのみならず目に見えぬ鬼神をもあはれと感ぜしむるものなれば親に事へ夫にかしづかむものはこの德なくてやはあるべきまして女子は其心せまくしてわらぬ事だに胸先づふたがるゝものにしあればば心を慰めんにもこよなきたよりぞかしされどいたづらなづみて日頭爲すべき事をだに懶くなりゆかむ和歌の道にもたがひぬべし

地　長野縣長野町　勝家かをる

人の學ぶべき道もさま〳〵あれどもかの目に見ぬ鬼神をあはれと思はせ猛きもの丶ふの心をも和らぐといふやまと歌こそこの國に生れては一際心をつくして學むまほしき業なれさるをひたすら歌としいへばあだなるすさびといやしめて徒らに月にあこがれ花にうかるゝものとのみ思へるはまことにかたはらいたくをこの限といふべし近頃みだりに外つ國風をめではやす時となりて何にまれかよまれひたすら彼にならひ文學ぶもやまと歌はもの遠しなど思へるもの丶少なからぬときくこそいとも〳〵うたてけれそも〳〵やまと歌は人の心を種として萬の言の葉となりたるものなれば見るもの聞くものさては物にふれ事につけ思ふ心の一としてその種ならざるはなしされど月の光も歌によりてます〳〵明なるべく花の色香もいよ〳〵まさりぬべしまして歌は智をすゝめ心を優にするものにして女の性質にはこよなう適ひたるものなれば學の道に心かけ給へる孃君達よもろともにいそしみはげみて學むざらむや歌はさらむや

人　熊本縣菊池郡城北村　佐々有鄰子

歌はよむことのかたきにあらずよくよむことのかたきなりと故人の金言うべなるかな此ごろ人のよみいづるをみればかりこものみだれがちなるふしのみにて神代の手ぶりをもしらぬ黄なる口つき

おほくなげきのさ霧に朝夕目もくれてなん

島田悦子

凡そ物ごとは其道に入らざれば是非曲直をたやすく判じ得べきものにあらず敷島の大和歌の奇しく妙なることを知らざるものは和歌は遊興の一部にて閑人などの外は用なきものと謗れどもこれまたく此道をわきまへぬものゝたはごとにぞありける見よ太田道灌の如き賤の女のさゝげ出だせる山吹の一と枝より此道に入りそめて我庵は松原つゞきの歌も今にのこりもろびとの口にのぼりてめでられ細川幽齋翁の如きも君はまだ遠くは行かじの一句より始めて和歌の徳を知り此道に遊びて奥ふかくきはめられたるにあらずや凡て人は心に喜怒哀樂の萠え出づるものをあらはして心慰むる事のなかりせば如何でか足ることを知るてふ古語の味ひを知るを得んさなければ喜ぶにつけ怒るにつけ心はいつも平かならず平ならざれば非ともなり曲ともなるは古よりためしあることにこそされば和歌の人生に樂つべきものにあらざる事は誠に見やすき道理とこそ云ふべけれ

本田せき子

天津御やゝの言玉のさきはふ幽とのたまひしわが豊葦原の言の葉は實に天照る下に類なきものなるかその言の葉の花とさきにほひし歌は一しはあはれにめでたきものにぞある古の人のいひけん力をもいれずして天地をも動かし目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ男女の中をも和らげたけき武士の心をもなぐさむるとは實にこの歌なりけりさるをうつり行く世の悲しさは歌としいへど徒らに明石の浦に島かくれ行く舟をしみ田子の浦に富士のみ雪をめで花に醉ひ月にうかるゝものとのみ思ひまして大方のものはかの異國のさかしらごとにまどはされそれとしいへど何にまれかにまれいとめで學びてわが御國の言の葉は物遠しなど論ふこそいとかたはらいたくも又うたてきはみなりけれそも歌は智識をすゝめ心を優美にし家を治め國を治むるなかたちにしてわが御國の臣民たらんものは男にまれ女にまれ心をつくして學びまほしき業なりかしあはれ歌は實に大御國の言の葉の花にしてこの盛衰はやがて御國の盛衰ともなりぬべからむなどおのが拙なき才をもしらずかにかくとそゝろごとをかいつけぬ

二藤まさ子

しきしまのやまと歌は世の人のま心のうれしきにつけかなしきにつけつゝわづか三十一文字よりやう〳〵千萬のことの葉となりてあるはうつくしき花をひらきあるはかぐはしき果をむすび人しらぬ根にふかき意をこめて朝日に匂ふ花のごときものになんありけるされどたゞに鬼神を泣かしめ男女

の中をやはらぐるのみにはあらでいひいづれも外國の夷をもわなゝかせ之を身に行へばまつろはぬ賊どもをもなびかするぞかしかかれど歌はかりにもすきものゝみやびわざにはあらず即ちわが國の固有なる日本魂の花にぞありける

碓井　信子

古より今に至るまで大空の月日の如くあふがれ後の世の龜鑑とたゝへらるゝ女子をあぐれば多くは和歌にすぐれ文にたくみなる人々なり抑和歌は千早ぶる神代よりいで來て遂に世の人々にもてはやさるゝやうなりにたり其功徳をあぐれど如何なる干戈の横たはる恐しき中にも和歌を詠じて千載の後の世までもくちせぬ譽を遺しゝ者いと多かりきれど古今集の序にも目に見えぬ鬼神をもあはれとおもはせたけき丈夫の心をもなぐさむとはいはれたり實に大和歌こそ此の皇國に生れし者はたれもたれも習はまほしき業なれ唐國にては詩を知らずばものいふなかれと孔子はのたまひしとぞきくされど大皇國にいきとしいけるものは花になくうぐひす水にすむ蛙に對しても和歌の道にいそしまずむあるべからずいさゝかおもふよしを筆にまかせて斯く論ひぬるを世の人々な笑ひ給ひそ

碓井たけ子

我身の如きはしたなき者が多くの姉妹に立ちまじりてものするはいとをこがましけれど長き夜の物語に翁よりつね〴〵聞きゐつる事どもあるはおのが思ふ一言のべんとすそも和歌は我がやまとの國の天地ひらけ始りける時より諸々の神々よみたび夫より人代に至り手習ふ人のはじめにしけると云ふ彼の釆女のあさか山の歌にて王も怒をやはらげ給ひしとかや實に貫之朝臣の古今集序に力をもいれずして天地を動かし云々とものせられし事こそ理なれ此頃大方の學校の教を聞くにやまと言の葉はなほざりにて外國の事としいへどなにゝまれかにまれひたすらいそしみて狂ひ出しゝ駒の如く遂には世の人のあなどりを招くに至るも其本は忘れ末に走りしこそこよなき過なれそをふみ進はず我がやまとの國に生れたらん人は老も幼きも貴きも賤きも昔の人々にも劣らぬやう和歌の道にいそしみあはれ明治の淸紫と後の世にたゝへられ多くの人々の摸範とならまほしきことになん

植木　鋼子

花になく鶯水にすむ蛙の聲を聞は生とし生るものいづれか歌をよまざりけると古の聖のいひけんやうに實に和歌は神代よりの國ぶりなれど誰もよみ得まほしき事にこそされど古より今に至るまで其時のさまにしたがひ又家々の流として彼是如何をあけつらふ人々も有べけれど其道にくはしく立入たる者はとまれかくまれ未だ難波津あさか山もふみなれぬものゝよしあしをいへどとていかでよ

く當を得べけんやまづおのれ心によからんと思ふを師としみやびにしな高くよみ例はんこそ初心の者の心得とは思ひ侍れ

大亦　隆子

人の心をやはらげたのしましむるは大和うたにしく者なかるべし古今集のはしがきにも目に見えぬおに神をもあはれと思はすとかけるも實にさることなりされバ吾大御國の民草はなにはのことのよしあしにかゝはらずこの歌を心得ずてはかなはざる事なりしかはあれどおのれ淺學のをこましさもかへりみずつら〳〵思ひ考ふるに和歌は各心に思ひめに見しことゞもを折にふれていひ出ずるものなれどかりにまうけし題詠にもこのこゝろもてよまむこそこの道のたくみとは覺ゆれ日々この事にかゝづらひてたくみにかざりしをよまむよりは糸くり田たがやすいとまにおのが心の底より出たらん賤の少女の詠歌こそ殊にすぐれてゆかしと覺ゆれど大方の人の心の程はいかゞなるらん

宇多田楊子

歌は物にふれ事にかんじ思ひ胸にあまりて初てはなつ聲なりされバ神世時代よりとく始まり力をもいれずして天地を動かし鬼神をなかしめ武士の猛き心を慰むるなどいと功績の大なる者にぞありけるさるを後の世に詞あやなし一ふしあるをのみ歌とおもへる人も出できぬさる人は歌よむ事はしらずしていたづらに世の人を迷はしむる物とこそはいふべけれ梢をつたふ鶯草むらに宿る鈴虫も春秋の氣候に感じて自然にうたひ出づれバこを聽きて樂み悲しまぬ者とてはあらずされどたゞ物につけ心に思ふまゝをさへ讀み出づれど人の感情をも起さしめてこれぞまことの歌にぞあるましてかの心なき鳥虫さへもかく歌ひ出づるを人と生れうた讀むわざをしらずしてかなふべしやは

十一月兼題

五日
- 歌……夜水鳥
- 文……冬野

廿日
- 歌……春日局
- 文……雪の朝友を訪ふ

女鑑第四十八號目次

〔明治二十四年八月八日内務省許可
明治廿五年三月十二日遞信省認可〕

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未稅の來書は一切受取不申候事

女鑑 每月二回五日廿日發行

定價壹册金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿六年十月十九日印刷
同年同月二十日發行

發行兼印刷人 東京麴町區平川町五丁目十六番地 川崎直衛
編輯人 同 東京京橋區築地二丁目二十一番地 山根勇藏
發行所 國光社

（東京國光社印刷部印行）